

千葉県八千代市

不特定遺跡発掘調査報告書 1

全塚所在塚・萱田町川崎山遺跡b地点

高津新田野馬塚遺跡・尾崎群集塚

神久保寺台遺跡・稻荷前遺跡

2002・3

八千代市教育委員会

序 文

八千代市は下総台地の北西部に位置しており、東京への通勤圏内として昭和32年の八千代台団地の入居以来、住宅都市として発展してまいりました。特に、昭和40年代半ばからは米本団地をはじめとして次々と住宅団地の建設が行われ、それに伴う人口増加は目ざましいものがあり、八千代市の姿は近郊農業地帯から住宅都市へとその趣を変えてまいりました。

しかし、八千代市にはかつての印旛沼と新川などの豊かな水を背景とした多くの自然が残され、新川を中心とする水辺は市民の憩いの場ともなっており、今後も、自然を多く残した住宅都市として発展していくことと思われまます。

一方、この住宅都市としての発展にともなう宅地造成等によって失われる遺跡を保護するために、八千代市教育委員会では遺跡の発掘調査を行ってまいりました。そしてこの水と緑の豊かな大地には、およそ三万年の昔である旧石器時代から多くの人々が生活を営んできていたことが近年の発掘調査によって分かってまいり、また、新川流域の奈良・平安時代のムラの跡からは数多くの墨書土器が出土し、八千代市は全国でも墨書土器が出土する有数な地域となっております。

このような中で、個人などによる小さな土地の開発などによって失われる遺跡を保護するために八千代市教育委員会では不特定遺跡群調査事業として、記録保存の措置を行うことを目的に発掘調査を行ってまいりました。時には八千代市の単独事業として、また、千葉県教育委員会の補助を得て発掘調査を実施してまいりました。いずれも個人を中心とした開発を対象としたものであるため小規模な調査ですが、遺跡からは八千代市域に住んださまざまな時代の人々の暮らしの跡があらわれております。

今回、その数か年にわたる不特定遺跡調査事業の成果を千葉県教育委員会の補助を得まして、ここに本書として刊行することとなりました。本書が、考古学はもとより、広く学校教育の場や歴史・郷土を学ぶ生涯学習の資料として多くの方々に活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査にあたってご協力いただきました事業者の皆様をはじめとして、遺跡の調査や整理において、ご指導やご助言をいただきました千葉県教育委員会をはじめとする関係諸機関や諸氏に厚くお礼申し上げますとともに、調査や整理に従事された皆様には深く感謝いたします。

平成14年3月

八千代市教育委員会
教育長 礒貝 謹吾

例 言

1. 本書は、八千代市教育委員会が不特定遺跡調査事業として千葉県文化財保存事業補助金を得て実施した発掘調査と、八千代市の単独事業として実施した発掘調査の調査報告書である。
2. 整理及び報告書の作成については、平成13年度千葉県文化財保存事業補助金を得て不特定遺跡整理事業として八千代市教育委員会が行った。
3. 発掘調査は主として、遺跡包蔵地における個人等による土木工事を伴うを開発に対して行われたものであり、特に千葉県補助事業として実施した調査については、その補助事業について千葉県教育庁文化課と協議のうえ実施したものである。
4. 今年度、千葉県文化財保存事業補助金を得て、不特定遺跡整理事業として整理・報告する遺跡は、次の6遺跡である。

遺 跡 名 所 在 地 調 査 年 月 日	事業目的	事業者	備 考
	調査面積／照会面積	調査担当者	
(1) 金塚所在塚 八千代市麦丸字金塚1130-1の一部 平成元年11月29日～12月8日	倉庫建設 225/4,439.45m ²	山崎 壽徳 森 竜哉	調査は県費補助事業 本調査
(2) 萱田町川崎山遺跡 八千代市萱田町字川崎山 730-1 平成4年4月2日～4月8日	店舗建設 15/15m ²	長岡 和子 森 竜哉	調査は市単独事業 本調査
(3) 高津新田野馬堀遺跡 八千代市八千代台南3-59-1 平成10年1月28日～2月12日	共同住宅 500/1,585.65m ²	稲垣 和雄 秋山 利光	調査は県費補助事業 確認本調査
(4) 尾崎群集塚 八千代市大和田新田字平作 855-4 平成10年2月10日～2月23日	地区ゴミ置場 38 /38 m ²	高橋 岩男 森 竜哉	調査は市単独事業 本調査
(5) 神久保寺台遺跡 八千代市神久保字寺ノ台73-2 平成10年3月2日～3月13日	資材置場 451/4,513m ²	星野よね他 森 竜哉	調査は県費補助事業 確認調査
(6) 稲荷前遺跡 八千代市上高野字稲荷前1130-1 平成10年3月18日～3月31日	宅地造成 120 /7,081 m ²	新日本建設 株式会社 宮沢 久史	調査は県費補助事業 確認本調査

5. 本書において位置図に掲載使用した地図は、八千代市都市図（八千代市都市計画課所管）を一部改変して使用した。
6. 本書の作成にあたっては、第1章から第6章及び第8章を朝比奈竹男が、また、第7章を宮沢久史が担当した。
7. 報告書作成に関する拓本及びトレース等の図版作成については川口貴明、小林孝彰、内田武志等が行った。

8. 本報告書中の挿図については，原図の関係から縮尺は不統一であるので注意されたい。

9. 不特定遺跡整理事業にあたっての組織は次のとおりである。

整理主体 八千代市教育委員会 教育長 磯貝謹吾

【事務担当】

樺 沢 明	八千代市教育委員会生涯学習部長		
山 本 正	八千代市教育委員会生涯学習部次長		
鈴 木 賢 治	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長		
立 石 眞	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課副主幹		
相 馬 文 子	同	文化財保護班主査	
高 橋 博	同	文化財保護班主査	
朝比奈 竹 男	同		主任文化財主事
宮 沢 久 史	同		主任文化財主事

【整理担当】

朝比奈 竹 男	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護班主任文化財主事	
宮 沢 久 史	同	主任文化財主事

10. 本書に掲載した遺跡の整理においては，次の方々のご指導やご教示を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）

千葉県教育庁文化課，八千代市史編さん委員会，鈴木普二男，村田一男，郷田良一，上守秀明，

目 次

序 文

— 八千代市教育委員会 教育長 磯貝謹吾

例 言

目 次

挿図目次・図版目次

第1章 調査に至る経緯

第1節 不特定遺跡調査事業の概要	1
第2節 八千代市の自然環境	2
第3節 八千代市の考古学的環境	2

第2章 金塚所在塚

第1節 調査に至る経緯	7
第2節 遺跡の立地と調査の概要	7
第3節 調査の成果	8
第4節 金塚所在塚の調査のまとめ	10

第3章 萱田町川崎山遺跡

第1節 調査に至る経緯	11
第2節 遺跡の立地と調査の概要	11
第3節 調査の成果	12
第4節 萱田町川崎山遺跡の調査のまとめ	14

第4章 高津新田野馬堀遺跡

第1節 調査に至る経緯	15
第2節 遺跡の立地と調査の概要	15
第3節 調査の成果	16
第4節 高津新田野馬堀遺跡の調査のまとめ	19

第5章 尾崎群集塚

第1節 調査に至る経緯	20
第2節 遺跡の立地と調査の概要	20
第3節 調査の成果	21
第4節 尾崎群集塚の調査のまとめ	23

第6章 神久保寺台遺跡

第1節 調査に至る経緯	24
第2節 遺跡の立地と調査の概要	24
第3節 調査の成果	25
第4節 神久保寺台遺跡の調査のまとめ	29

第7章 稻荷前遺跡

第1節 調査に至る経緯	30
第2節 遺跡の立地と調査の概要	30

第3節 調査の成果	32
第4節 稻荷前遺跡の調査のまとめ	35
第8章 不特定遺跡調査のまとめ	36
調査報告抄録	

挿 図 目 次

図1 八千代市の主な遺跡	3	図14 尾崎群集塚第01号塚の出土遺物	23
図2 金塚所在塚の位置と周辺の地形	7	図15 神久保寺台遺跡の位置と 周辺の地形	24
図3 金塚所在塚測量図	9	図16 基本土層	25
図4 萱田町川崎山遺跡の位置と 周辺の地形	11	図17 神久保寺台遺跡の遺構配置図	26
図5 萱田町川崎山遺跡の遺構配置図	12	図18 堀01土層図	27
図6 基本土層	13	図19 神久保寺台遺跡の遺物	27
図7 土坑第01号実測図	13	図20 稻荷前遺跡の位置と周辺の地形	29
図8 高津新田野馬堀遺跡の位置と 周辺の地形	15	図21 稻荷前遺跡の遺構配置図	30
図9 高津新田野馬堀遺跡の遺構配置図	16	図22 基本土層	30
図10 基本土層	16	図23 炉穴第01号実測図	32
図11 高津新田野馬堀の土層	17	図24 土坑第01号実測図	33
図12 尾崎群集塚の位置と周辺の地形	20	図25 稻荷前遺跡の遺物	33
図13 尾崎群集塚第01号塚測量図	22	図26 方形周溝条遺構第01号実測図	34

図 版 目 次

図版1-1 金塚所在塚近景	図版4-1 尾崎群集塚第01号塚近景
-2 金塚所在塚の調査風景	-2 尾崎群集塚第01号塚調査部近景
-3 金塚所在塚の封土堆積状況	-3 調査風景
-4 塚下の溝完掘状況	-4 封土堆積状況
	-5 焼土分布状況
図版2-1 萱田町川崎山遺跡調査区近景	図版5-1 神久保寺台遺跡調査区近景
-2 土坑第01号完掘状況	-2 第01号竪穴住居跡確認状況
-3 土坑第01号の土層堆積状態	-3 土坑第01号確認状況
	-4 堀01の確認状況
	-5 堀01の土層堆積
図版3-1 高津新田野馬堀遺跡調査区近景	図版6-1 稻荷前遺跡調査区近景
-2 野馬堀の確認状況	-2 稻荷前遺跡調査風景
-3 野馬堀の土層堆積(中央トレンチ)	-3 炉穴第01号完掘状態
-4 土坑第01号	-4 土坑第01号完掘状態
	-5 方形周溝遺構第01号完掘状態

第1章 不特定遺跡調査事業の概要

第1節 調査に至る経緯

東京の通勤圏にある各行政にとって宅地造成等の開発行為が近年一段落したかに見えるが、八千代市にあっては面積規模はともかく様々な開発行為が、公共事業および民間事業として計画され実施されている。そしてそれに伴う発掘調査も数多く行われているところである。その事業計画の把握は千葉県教育委員会の指導のもとに、土木工事等に伴う埋蔵文化財の事前照会の制度が整えられてきた成果でもあるが、八千代市教育委員会の文化財保護行政の整備が次第に進み、従前より、より多くの照会が行われるようになったことにもよろう。

また、八千代市の事情として平成8年度の東葉高速鉄道の開通があげられる。この鉄道の開通が具体化する以前から、次々と大規模な開発が計画され実施されてきた。特に、駅予定地周辺の区画整理事業が行われ、萱田土地区画整理事業、西八千代土地区画整理事業、辺田前土地区画整理事業等があげられる。また、市の北部地域の学園都市や東部地域のカルチャータウン等もあげられる。これら造成に係わる発掘調査には、(財)千葉県文化財センターによる萱田遺跡群はもとより、八千代市教育委員会も発掘調査体制をとり対応してきたところである。

一方、開発行為に係わる照会に対しては、市の単独事業として試掘の体制を整備し、また、遺跡所在地への開発行為には国庫補助金を得て市内遺跡調査事業として確認調査を中心に実施しているところである。しかし土地の経済的な有効利用を図ろうとする個人事業者や小企業等による、遺跡所在地における開発行為や地区の生活環境整備等へも埋蔵文化財保護への対応をしていくことも必要であった。このため八千代市教育委員会では市の単独事業としての不特定遺跡調査事業や、千葉県の文化財保存事業補助金を得て、個人や中小企業等の小規模開発に対して確認調査や確認本調査といった文化財保護への対応をとってきているところである。

今回、本書にて整理・報告する金塚所在塚、萱田町川崎山遺跡、高津新田（野馬堀）遺跡、尾崎群集塚、神久保寺台遺跡、稲荷前遺跡の6遺跡については、個人を中心とした遺跡所在地での開発行為等に対して実施した発掘調査の成果を報告するものである。金塚所在塚は平成元年度に調査を実施し、萱田町川崎山遺跡は平成4年度に、高津新田（野馬堀）遺跡、尾崎群集塚、神久保寺台遺跡、稲荷前遺跡の4遺跡は平成10年度に調査を実施したものである。このうち金塚所在塚、高津新田（野馬堀）遺跡、神久保寺台遺跡、稲荷前遺跡については千葉県文化財保存事業補助金を得て実施し、萱田町川崎山遺跡と尾崎群集塚は八千代市の単独事業として発掘調査を実施した。

各遺跡の調査に至る経緯等は後章の各遺跡の報告を参照していただくとしても、金塚所在塚をはじめとして6遺跡の調査は、いずれも大規模な調査ではなく遺跡の全容を捉えることはなかなかできなかった。しかし、調査の成果は八千代市の遺跡について新たな知見を十分に与えてくれるものであった。

その後、各遺跡の調査終了後に若干の整理は行ったものの、報告書の刊行へは様々な状況があり進行しなかった。今回、平成13年度千葉県文化財保存事業補助金を得て整理と報告書の刊行となった。八千代市においては整理に対して事前に準備を始めていたが、補助事業としての整理は平成14年2月25日から行った。整理事業は図面の修正とトレースや遺物の拓本を中心に整理は進められたが、その事業も本書の刊行をもって終了することとなる。

第2節 遺跡の自然的環境

八千代市は下総台地の北西部に位置し、下総台地特有の比較的起伏の少ない地形を呈している。台地の標高は低いところで12m程、高いところで30m余りを測り、一般的に南側急斜面、北側緩斜面となる地形となっている。水田面は第二次世界大戦後の印旛沼干拓工事や近年の土地改良工事などによって地盤が嵩上げされ、かつて印旛沼の水に悩まされた痕は見ることがないが、明治時代や大正時代に作成された地図をみると0mと記されたところもあり、台地縁辺部との比高差は2～5m程度である。市域の面積は約52km²となっている。

このような八千代市の地形も印旛沼に注ぐ新川とその支流である桑納川によって、大きく三つの台地に区分されている。千葉市からかつての印旛沼口へむかって北に突き出たような大和田地区の台地、船橋市からやはり印旛沼口へ突き出た睦地区の台地、新川の東、市域の東部を占める佐倉市から続く阿蘇地区の台地である。これらの大きな台地も複雑に樹枝状に開析され、小さな台地と谷津が入り組んだ地形となっている。そして台地は北側が緩斜面となり、南東乃至南側が急斜面となるような地形を形作っている。

一方、八千代市の水系は、本来、全て印旛沼へ流入するものであり、東京湾へ注ぐものはなかった。現在は人為的に開削され、印旛沼放水路として新川と花見川が繋がり、かつての新川上流の高津川や勝田川は東京湾へ流れ込むこととなったが、ちょうど千葉市横戸付近から千葉市、習志野市、八千代市境にかけて台地が広がっており、小さな分水嶺となっている。このため縄文海進時には海水は銚子より印旛沼に入り込み、縄文海進の最大時には、現段階の珪藻分析で確認できる限り、村上と萱田を結ぶ宮内橋辺りまでできていたものと考えられている。

このような自然環境の下で、八千代市域に住み着いた人々は、台地に多くの暮らしの跡を残してきたといえよう。

第3節 八千代市の考古学的環境

(1)旧石器時代

八千代市域において祖先の営みの痕跡が現れるのは、後期旧石器時代からである。村上込ノ内遺跡において当該期の遺物は出土していたが、萱田遺跡群の権現後遺跡の発掘調査によって局部磨製石斧が出土し、それまでやや曖昧であった八千代市域の旧石器時代が逆上ることとなった。そして同遺跡群の北海道遺跡、ヲサル山遺跡、井戸向遺跡、坊山遺跡、白幡前遺跡だけでも後期旧石器時代の各時期の遺物が出土しており、また、高津新山遺跡等では細石器が出土し、次第に八千代市域の旧石器時代の姿が明らかになりつつある。

(2)縄文時代

八千代市では全体的に縄文時代の集落跡の確認が少なく、今後に待つべき問題ともなっている。一方で、阿玉台式土器片の確認される包含地が多い傾向がうかがわれる。しかし竪穴住居跡の検出は、夏島期（高津新田遺跡＝大請遺跡）まで逆上っており、市域の縄文時代を考えるうえで貴重な資料となっている。

市域への縄文海進・海退がどのような形であったかはまだ判然としないが、八千代市の縄文時代を語る上で切り離せない自然環境として印旛沼がある。印旛沼に係わる貝塚としては、ヲイノ作遺跡が前期の貝ブロックを、ヲイノ作遺跡の出土土器からイワシ類の骨の圧痕が認められ、前期前半の印旛沼への係わりが知られる。しかし縄文時代中期については包蔵地は多いものの、貝塚などは知られず、印旛沼ま

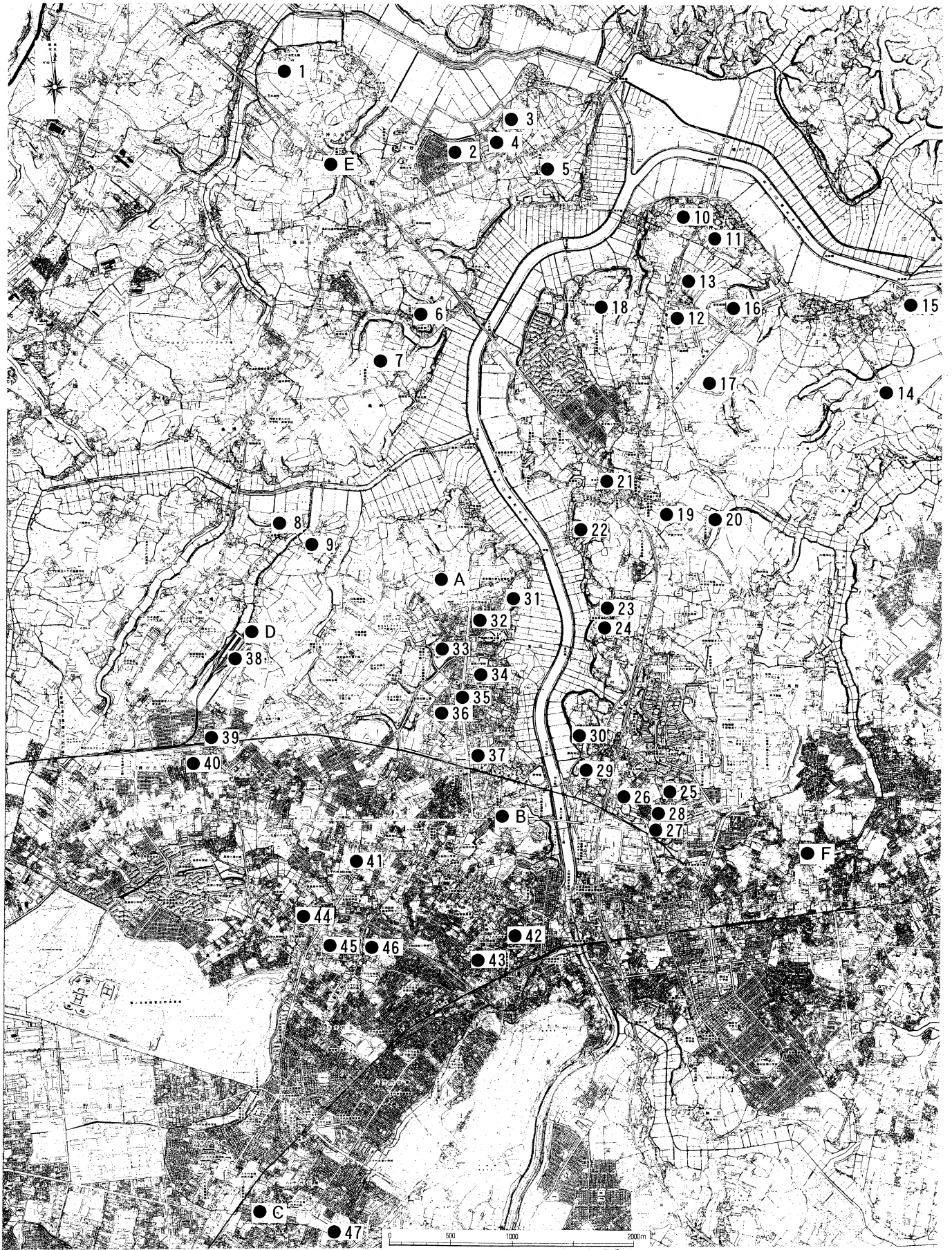


図1 八千代市の主な遺跡

主体とは海退との係わりがどの様な形であったか判然としない。後期の貝塚として、ヤマトシジミをした汽水性貝塚の佐山貝塚や神野貝塚があり、佐山貝塚はクロダイやスズキ等の魚骨も出土しており印旛沼に直接係わる最奥の貝塚となっている。なお、大野一郎が報告した保品あるとされた貝塚の所在が分からず、中期の貝塚の存在は不明と言うしかない。

晩期になると、土器片等を散見するが遺構などは明瞭ではない。かろうじて大江間遺跡からは晩期前半（安行Ⅲc期）の刳舟が出土しており、また、高津新山遺跡からは焼土散布を伴う不明瞭なシミ状の遺構から晩期末葉（千網Ⅱ，荒海）の土器が確認できるのみである。

(3) 弥生時代

弥生時代になると八千代市域の考古学的な姿は一変する。中期前半は不明であるが、中期後半になると環濠集落である田原窪遺跡等があり、後期になると萱田遺跡群の権現後遺跡、井戸向遺跡、北海道遺跡、白幡前遺跡や阿蘇中学校東側遺跡、栗谷遺跡など集落遺跡は増加する。集落跡と墓域（方形周溝墓群）が分離する遺跡として栗谷遺跡が知られている。また、臼井南式と言われる土器群と南関東系の土器群が混在する地域でもある。

(4) 古墳時代

印旛沼や新川、桑納川や勝田川を眺む台地縁辺部に古墳は造られている傾向があるが、食糧増産の開墾のため数多く破壊を被ったとも聞き、その実数は把握しかねている。かつて中期以降の古墳しか捉えられていなかったが、近年の調査で市域の田原窪2号墳や南谷古墳の前期古墳が確認され、古墳の築造が比較的早い時期から行われていたことをうかがわせている。しかし、円墳の堰場台古墳、神野芝山古墳群、平戸台古墳群、七百余所神社古墳や、前方後円墳である根上神社古墳等、市域の古墳の主体的な築造年代は終末期であったと考えられる。調査された堰場台古墳、神野芝山4号墳、平戸台2号墳等ではどの箱式石棺にも10柱前後の追葬が確認されている。

また、中期では、既に破壊されているが、神野芝山2号古墳から出土したと伝えられる石枕が残されている。残念ながらそれ以外の副葬品は伝えられず、詳細は不明である。

集落としては前期後半からの遺跡が多く、佐山台遺跡等の大規模集落が調査されている。また、中期になると小板橋遺跡では集落と伴い工房跡等が検出されている。後期後半になると内込遺跡を中心として小さな谷津を隔てた高津新山遺跡等、次第に集落遺跡の数を増してくる傾向がある。

(5) 奈良・平安時代

『倭名類聚抄』に載る「村神郷」の範囲が何処までであったかは論の分かれるところであるが、新川流域を中心とした本時代の集落遺跡は数多くなり、この新川流域における当該時期の遺物の特徴として墨書土器（線刻土器を含めて）の多さが上げられる。

奈良・平安時代の集落としては萱田遺跡群の各遺跡やそれに隣接する菅地ノ台遺跡、村上込ノ内遺跡
八千代市内の主な遺跡

A 金塚所在塚 B 川崎山 C 高津新田野馬堀 D 尾崎群集塚 E 神久保寺台 F 稻荷前

1 作山 2 佐山台 3 佐山貝塚 4 田原窪 5 平戸台古墳群 6 島田（妙泉寺）城跡 7 桑納前畑

8 吉橋城跡 9 尾崎館跡 10 神野芝山古墳群 11 神野貝塚 12 向境 13 境堀 14 南谷古墳

15 大江間 16 栗谷 17 上谷 18 逆水 19 赤作 20 阿蘇中学校東側遺跡 21 米本神社

22 米本城跡 23 七百余所神社 24 七百余所神社古墳 25 村上込ノ内 26 根上神社古墳 27 村上供養塚

28 村上第一塚群 29 浅間内 30 正覚院館跡 31 菅地ノ台 32 権現後 33 ヲサル山 34 北海道 35 井戸向

36 坊山 37 白幡前 38 芝山 39 ヲイノ作 40 ヲイノ作南 41 庚塚塚群 42 小板橋 43 堰場台古墳

44 高津館跡 45 高津新山 46 内込 47 高津新田

を中心とした村上遺跡群，上谷遺跡，向境遺跡，境堀遺跡等の東部遺跡群，高津新山遺跡や桑納前畑遺跡等，数多くの集落跡の発掘調査が行われている。

それぞれに墨書土器が出土し，「村神郷丈部国依甘魚」と記された人面墨書土器（権現後遺跡）や，「丈部乙刀自女形代」（白幡前遺跡）と記された土器等の人名や紀年銘の墨書土器が報告されている。また，整理が進められている上谷遺跡等の東部遺跡群でも数多く人名墨書土器が出土している。出土している墨書土器は圧倒的に1字の物が多いが，多文字の墨書土器もあり，後者の場合は人名を中心としているようである。人名のみの例が多いが，年号や月日，人面と共に墨書された土器もあり，市域の奈良・平安時代の土器編年に重要な役割を持つものとして期待されている。人面及び人名墨書のいくつかは形代，召代とも記されており，西暦 800年前後の地方の信仰の姿を物語っているとも考えられる。

(6)中世・近世

この時代の考古学的な資料としては，城館跡と塚群が遺跡の中心となり，板石塔婆（板碑）や塚等に納められた埋納資料が数多くなる。

城館跡としては高津館跡，正覚院館跡等が形状からしてやや古く考えられ，戦国期にかけては米本城跡，島田（妙泉寺）城跡，吉橋城跡と尾崎館跡などが残されている。しかし同時代の資料は失われ，地元に残されてきた城にまつわる伝説が中心となる。しかし八千代市内には，千葉氏が信仰したという妙見神を祀る地区があり，特に米本城跡では城の北東（米本神社）と南東（七百余所神社）に妙見神を祭神とする神社があること，当時の下総国の支配関係からも千葉氏の勢力下にあったと考えられる。

出土資料としては板碑が数多く，しかも市域の阿蘇地区はかつて印旛郡に属していた関係からか，武蔵式板碑を主体としながらも下総式板碑も出土している。市域は下総式板碑の分布の南西の一端を占めていると言われており，その分布を考えるうえで貴重な資料となっている。また，八千代市北東部の日蓮宗地区では種字板碑から題目板碑への変化がみられ，千葉介が八千代市域の一部を法華経寺に寄進した地区での教線の変化をうかがい知れるという。

一方，埋納資料としては，井戸向遺跡では埋納された 660枚の渡来銭や鑑と刀子を埋納した土坑も検出されている。

八千代市域の塚のほとんど，は近世の所産であると考えられる。村上供養塚では塚頂部直下に常滑産の瓶と在産の不識壺，カワラケと寛永通寶が出土し，村上第一塚群 1号塚では多量の寛永通寶が出土している。また，大和田新田に所在した向山塚群の 1基からは，常滑産の瓶に花崗岩で蓋をつくり，中には六十六部のための埋納目的や埋納者，年月，先達を河原石に刻んだものが納められていた。これらは近世の地方の信仰を考える上で貴重な資料となっている。

一方，戦国時代から近世初頭にかけて，作山遺跡ではT字形火葬墓が，逆水遺跡では土坑墓，赤作遺跡でも座棺式の墓壙が検出されている。また，平成13年度の浅間内遺跡の調査でも座棺の墓壙が検出されており，六文銭の出土とともに，葬制の変遷がたどれるものとなっている。

近世においては八千代市域は阿蘇地区を中心として佐倉藩領と，大和田・睦地区は幕領と旗本，御家人領となっていた。そして近世の小金牧の牧内は直接的には市域には関係ないが，村々は牧付として位置付けられており，市内に残る古文書等から堀浚等や鹿狩に駆り出されていたことが分かっている。本書で報告する高津新田野馬堀は小金牧の野馬除土手，野馬堀の一画であり，現在も船橋市や千葉市との市境となっており，近世の土地利用が現在に続くものとなっていることをうかがい知る遺跡である。

参考文献

大野一郎「北相馬・印旛・稲敷三郡に於ける貝塚の淡鹹及び土器の厚薄分布表」『考古学雑誌』17-11

1902年

- 大川清, 金子浩昌, 他 「印旛沼出土の刳舟」 『古代』 3 1951年 早稲田大学考古学会
- 助千葉県都市公社 『八千代市村上遺跡群』 1975年
- 助千葉県文化財センター 『八千代市権現後遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』 1984年
 『八千代市北海道遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』 1985年
 『八千代市ヲサル山遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』 1986年
 『八千代市井戸向遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－』 1987年
 『八千代市仲ノ遺跡・芝山遺跡－東葉高速鉄道引込み線および車庫用地内埋蔵文化財報告書－』 1989年
 『八千代市白幡前遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－』 1991年
 『八千代市坊山遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ－』 1993年
 『八千代市沖塚遺跡・上の台遺他－東葉高速鉄道路埋蔵文化財調査報告－』 1994年
 『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』 1994
- 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区財調査報－』 1985年
- 八千代市教育委員会 『八千代市遺跡分布調査概要 付 八千代市神野芝山2号墳発掘調査概報告』 1972
 『千葉県八千代市高津新山遺跡－昭和56年度確認調査の概要－』 1982年
 『千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅱ－昭和57年度確認調査の概要－』 1983年
 『千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅲ－昭和58年度確認調査の概要－』 1984年
 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告－平成3年度－』 1992年
 『八千代の遺跡－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告－』 1983年
- 八千代市市史編さん委員会 『八千代市の歴史』 1978年 八千代市
 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』 1991年 八千代市
 『八千代市の歴史 資料編 近世Ⅱ』 1994年 八千代市
 『八千代市の歴史 資料編 自然Ⅱ』 1999年 八千代市
- 上高野原古墳群発掘調査団 『千葉県八千代市村上供養塚発掘調査報告書』 1974年
- おおびた遺跡調査団 『おおびた遺跡－八千代市少年自然の家建設地内遺跡－』 1975年
- 八千代市中世館城址調査団 『八千代市中世館城址調査報告』 1976年 八千代市教育委員会
- 睦小学校北方遺跡調査会 『千葉県八千代桑納前畑遺跡』 1978年
- 八千代市遺跡調査会 『千葉県八千代市阿蘇中学校東側遺跡』 1980年
 『千葉県八千代市睦小学校遺跡』 1981年
 『千葉県八千代市阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』 1984年
 『千葉県八千代市仲ノ台・ヲイノ作遺跡他発掘調査報告書』 1996年
 『千葉県八千代市内込遺跡発掘調査報告書』 2001年
 『千葉県八千代市上谷－第1分冊－』 2001年
 『千葉県八千代市栗谷－第1分冊－』 2001年
- 八千代市歴史民俗資料館 『埋めて願う～銭・甕・経筒～』 1998年
 『赤土の中の文化～八千代市域の旧石器時代～』 1999年
- 八千代市立郷土博物館 『小金牧と狩り』 2000年
 『古代の集落』 2001年

第2章 金塚所在塚

第1節 調査に至る経緯

平成元年8月、山崎寿徳氏より八千代市麦丸字金塚1130番1の一部、4,439.45㎡について、倉庫の建設に伴い「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が行われた。当該地は米本道南遺跡（遺跡番号151）として把握された範囲内であり、八千代市教育委員会では文化財担当者によって現地踏査を行うこととした。しかし現地は山林のため、状況が詳細には捉えることが難しく、その状況を付して千葉県教育委員会へ副申した。その後の再度の現地踏査等によって、その区域には塚が1基所在し、工事を行うのであれば照会面積のうち225㎡については調査が必要である旨の通知を県教育委員会から受け、事業者には回答した。

その後、市教育委員会では工事を行うとなれば、塚1基が所在する225㎡については調査が必要であると、事業者との間で協議を重ね、発掘調査を実施することもやむを得ないとこととなった。調査については、事業主体が個人である事を考慮し、千葉県教育庁文化課と協議の結果、不特定遺跡調査事業として県費補助を得て行うこととなった。

そして調査の事前準備が整い次第、発掘調査に着手することとなり、平成元年11月29日から12月8日にかけて八千代市教育委員会が実施した。なお、包蔵地については米本道南遺跡としていたが、（現在は麦丸遺跡；遺跡番号151に統合されている）、調査対象が塚1基であることから字名をとって金塚所在塚（遺跡番号289）として分離した。

第2節 金塚所在塚の立地と調査の方法

金塚所在塚は八千代市麦丸字金塚1130番1に所在し、当時の現状は山林であった。

この塚は、新川の支流である桑納川を北に臨み、更に桑納川から南に入り込む谷津を東に臨む標高24mの台地平坦地に築造される。水田面との比高は4mから7mを測る。築造された台地は24m前後を保つほぼ平坦な台地として展開するが、金塚所在塚が立地する位置は、北の谷津に向かってやや傾斜している感じを目視的に与えてはいるが、地図上では現れない地形である。

調査対象面積は225㎡であり、調査対象は小規模な塚1基であった。調査は塚の測量から始めた。しかし公共座標系及び水準についての測量は、諸般の事情からその余裕がなく、塚の頂部を原点0mとして測量を実施した。等高線については、目視として塚の高さが無いため、20cm間隔として測量した。測量実施後、東西と南北にセクションベルトを設定後、ベルト部分を残し封土を除去し、主体部の確認に努めた務めたが検出されなかった。しかし、塚の東下に、塚に伴う溝状遺構1条を検出した。

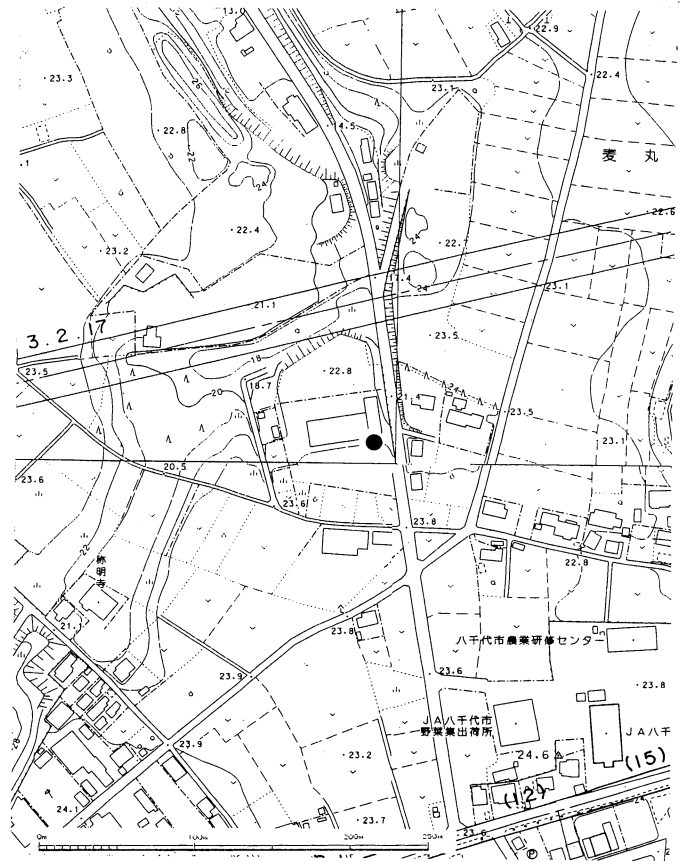


図2 金塚所在塚の位置と周辺の地形

第3節 調査の成果

測量の結果、塚の形状はやや崩れているが円形の塚であると判断した。塚の下、東側には半周する状態で溝状遺構がつくられていた。なお、塚の規模などは次のとおりである。

形状 円形塚 塚の一部において現代の攪乱を被り、形状が不明瞭であり隅丸方形状を呈するが、測量図及び塚の下より検出した溝状遺構等から、円形塚と判断した。

規模 東西10.80m×南北10.75m×塚高1.0m

封土 塚に積み上げられた封土は、基本的に黒味を少し含んだ暗褐色土と黒味の薄い褐色土との互層であった。しかし一部については、明確でない層も存在する。層のしまりは塚の性質から封土が積み上げられて築かれるため、全体的にしまりはあり、その中で比較することとした。

I層 暗茶色土層 表土層。木や下草の繁茂による根が多く、塚の封土への影響が大きい。

II層 暗褐色土層 暗褐色土を主体とした、しまりある層。

III層 褐色土層 ソフトローム層。

1層 暗褐色土層 やや褐色味が強い。かなり表土（I層）の影響を被り、そのためか層のしまりは劣る層である。

2層 暗褐色土層 やや黒味を呈す。ローム粒，黒色土粒を含む層。

3層 暗褐色土層 やや褐色味が強い。ローム粒，黒色土粒を含む層。

4層 暗褐色土層 やや黒味を呈す。ローム粒，黒色土粒を含む層。

5層 暗褐色土層 やや褐色味が強い。ローム粒，黒色土粒を含む層。

6層 暗褐色土層 やや黒味を呈す。ローム粒，黒色土粒を含む層。

7層 暗褐色土層 ローム粒を斑状に含み，黒色土粒との半々の層で褐色が強い層。若干しまりに欠ける層でもある。。

8層 暗褐色土層 ローム粒を少量含む層。軟性，粘性なく，ボソボソな層。

9層 暗褐色土層 第7層に類似するが，どちらかと言うと黒色土系である。。黒色土粒の割合が多くなる。層はしまって強い。

10層 暗褐色土層 第9層に類似する層であるが，第11層に比べ黒色味が強い。ローム粒を斑状に含み，その含まれる割合は黒色土粒と半々の層であり，基本的には褐色が強い。若干しまりに欠ける層。。

11層 暗褐色土層 第9層に類似する層であるが，第10層に比べ褐色土が強い。ローム粒を斑状に含み，黒色土粒との半々の層で，褐色が強い。若干しまりに欠ける層。

12層 暗褐色土層 第7層に類似するが，やや黒色味を呈す層。ローム粒を斑状に含み，黒色土粒との半々の層で，褐色が強い。若干しまりに欠ける層。

13層 暗褐色土層 ローム粒を斑状に含み，黒色土粒との半々の層で，褐色が強い。若干しまりに欠ける層。 第7層に類似。やや褐色味を呈す。

14層 暗褐色土層 ローム粒を少量含む層である。軟性，粘性なく，ボソボソな層である。第8層に類似する。

15層 暗褐色土層 ローム粒を斑状に含み，黒色土粒との半々の層で，褐色が強い。若干しまりに欠ける層。第12層に比べてローム粒が多い層。

16層 黒色土層 最も黒色味が強く，黒色土を主体とする層である。ローム粒を若干含み，しまっている層。

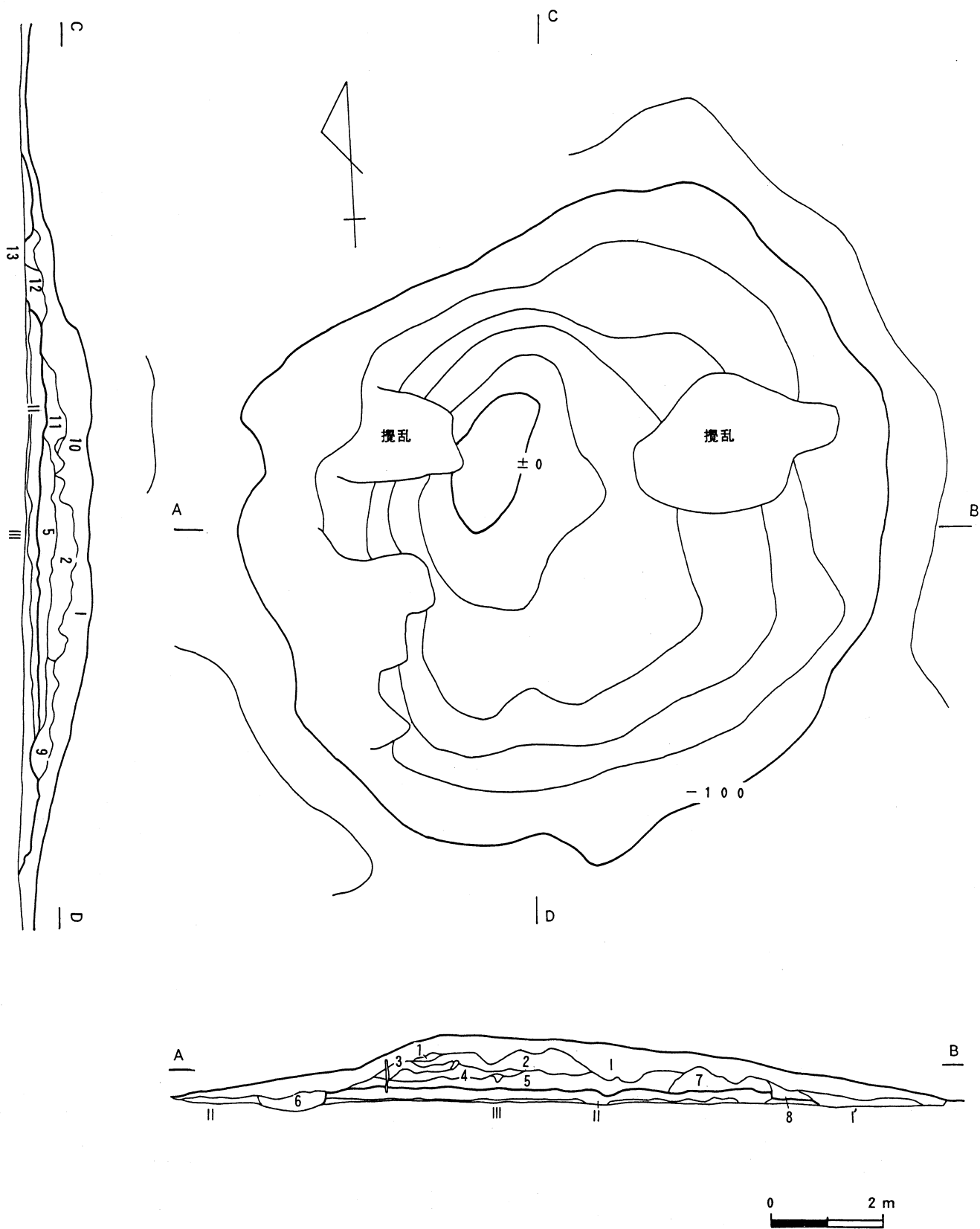


图3 金塚所在塚測量図

溝状遺構 塚の東側、等高線の最下端の下から検出された。溝の南東側は底と上場がハッキリしないものである。溝はほぼ半周しており、底部は平坦ではなくやや凹凸がある。

溝の幅は1.10mから1.30m、深さは0.04から0.10mを測る。

遺物 塚の封土からは、縄文土器及び土師器の小破片が少量出土した。そして絹雲母片岩の小破片や金属片1点も塚の下部から出土し、また、金属片1点が溝の上場より10cm程浮いた状態で出土している。残念ながらともに遺存が悪くその用途、種別を判断するにはいたらず、図示出来る状態ではなかった。

第4節 金塚所在塚の調査のまとめ

今回の金塚所在塚の調査においては調査対象地が塚という限定的なものであったため、包蔵地である米本道南遺跡については明らかに出来なかった。確かに塚の部分の調査では竪穴住居跡等の遺構は確認できなかったが、周辺の畑は縄文土器や土師器等が散布する包蔵地であり、当該地一帯は米本道南遺跡として把握される範囲内であり、将来的には包蔵地への調査も必要であると考えている。塚の南側には萱田遺跡群のうち権現後遺跡やヲサル山遺跡が所在している。このことから表面観察上だけではなく、埋蔵文化財という性格の上にとって遺跡の把握が必要となってくると思われる。

しかし調査では、塚の詳細な時期は埋納資料が検出されず明らかに出来なかったが、近世の塚の姿の一端を現すことが出来たと考えている。また、塚がの形状がやや不明瞭であるのは、樹木の根や現代の掘削によって、変形しているためと考えられる。

ところで塚の封土は何処から集められ運ばれたのであろうか。一辺10.8m、高さ1.0mという小規模な土量の塚では、築造者たちはどの様に対応したのであろうか。調査は塚の部分だけと限定的であり、その外縁部にトレンチが入れられなかったため、塚の周縁からかき集められたのかは定かでないが、封土から縄文土器片や土師器片が出土した事は、封土のために使われた土は塚周辺の包含層からかき集められた可能性があると考えている。

また、小破片ではあるが出土した絹雲母片岩をどの様に捉えたらよいであろうか。絹雲母片岩の使用例が多いのは、八千代市域にあっては古墳終末期の箱式石棺に使用される石材であるが、また、下総式板碑に転用される例も見受けられるものである。古墳の石棺の抜き取りとしても小破片であり即断出来かねる状態である。また、市域にあっては下総式板碑は旧印旛郡域に属した阿蘇地区に出土するものであり、旧千葉郡域に属する麦丸地区にあっては板碑とは考えにくいものである。南側の萱田（現ゆりのき台）の梵天塚では常滑壺（1500年代）と共に武蔵式板碑が出土しているが、緑泥片岩製である。このように考えると、板碑としての絹雲母片岩とは思えず、塚を築くにあたって築造者たちの何らかの信仰を考える必要があるのだろうか。しかし市域等での類例が寡聞にしてなく、今後の資料の増加にまちたいと思っている。

ところで金塚所在塚の位置は、近世村落でいう麦丸村と大和田新田の境に位置するように築かれている。そして大和田新田から麦丸へ抜ける本道（よなもと道）に対して、脇道の側に塚は所在している。近隣は萱田との境であり、麦丸村としては村の外縁域に築いていることになる。この字金塚地区が近世の麦丸村にとってどの様な位置であったかは、近世資料に待たねばならないが、残念なことに「麦丸村絵図」とされるものは発見されておらず、近世資料の増加を待てば塚の所在位置から村の土地利用及び土地への考え方が把握できるのではないだろうか。

第2章 萱田町川崎山遺跡

第1節 調査に至る経緯

平成3年8月に長岡俊博氏より、八千代市萱田町字川崎山 730-1 地区外、2,401.61㎡について、店舗の建設の為に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が行われた。それを受けて八千代市教育委員会の文化財担当者は現地踏査を行った。現状は畑地と林地であり、土器片が若干散布していた。また、照会地に南面して接する都市計画道路では発掘調査が実施され、弥生時代及び古墳時代を中心とした集落跡が検出され、旧石器時代から平安時代にいたる各時代の遺物が出土していた。そして照会地は周辺の遺物の散布状況等から、萱田町川崎山遺跡（遺跡番号241）として把握されている地区であった。

このため照会地は遺跡の範囲内であり、その旨を事業者に回答し、取り扱いについて協議を重ねた。協議の結果、まず確認調査を実施することとなり、平成3年11月5日より11月12日にかけて市内遺跡調査事業（国庫補助事業）として確認調査を行った。この確認調査では縄文時代中期土器片を中心に遺物の包含が認められ、また、照会地の北東隅の地区に土坑1基が検出された。その確認面での平面プランの形状から陥穴と想定され、本調査対象面積は15㎡である事を確認した。

しかしその後、事業者が長岡和子氏に変更となり、本調査について再度の協議を重ねる事となった。この為、当初は土坑に対して継続しての本調査の実施を考えてたが、事業者の変更に伴い本調査の実施を見送った。再度の協議が整い、平成4年4月2日より4月8日にかけて土坑1基に対して、八千代市教育委員会が本調査を実施した。なお、本調査地区をb地点と呼ぶこととした。

第2節 遺跡の立地と調査の方法

本遺跡は八千代市萱田町字川崎山 730番1外に所在する。新川を東に臨む広い台地上の西端の一画に所在し、更に新川から南西に入り込む谷津に北面する、標高22mを測る台地平坦部縁辺に位置している。台地直下の谷津は既に住宅地などになっており、水田としての面影はないが、旧水田面との比高を復元すると8mを測る事となる。現状は、照会地の周辺に樹木が植えられ、中央は畑地となっていた。

調査は本調査対象面積が15㎡と極めて狭く限定的であり、表土除去に重機は使用できず、事業者の協力のもと、人力にて表土除去を行い遺構全体の検出を行うこととした。遺構確認面はソフトロームとして表土を除去した。遺構検出後、土坑を半裁する形で覆土を除去し、遺物の検出と覆土堆積の把握に努めた後、残りの半分の覆土を除去した。

なお、公共座標系及び水準を使用できず、仮原点を設定して遺構実測の基本杭とした。

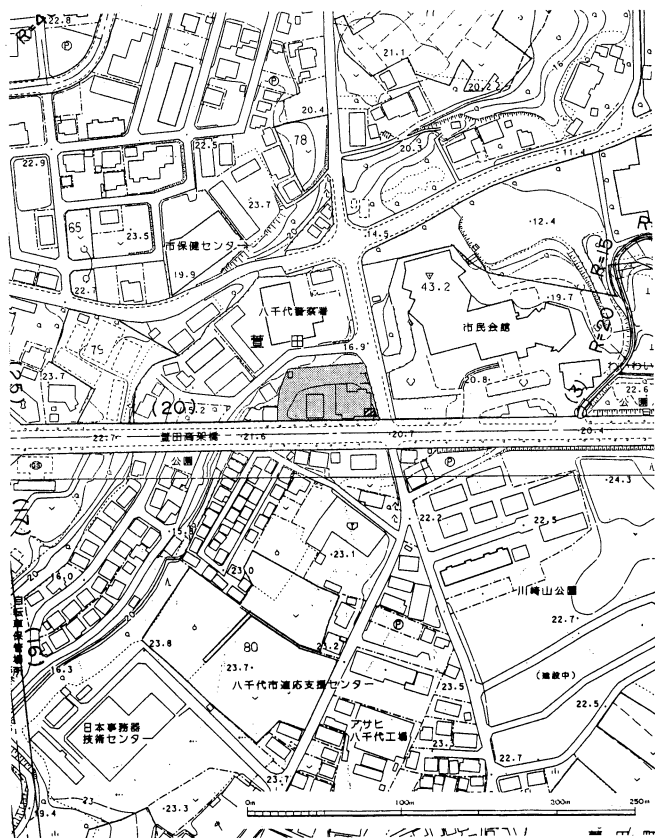


図4 萱田町川崎山遺跡位置と周辺の地形

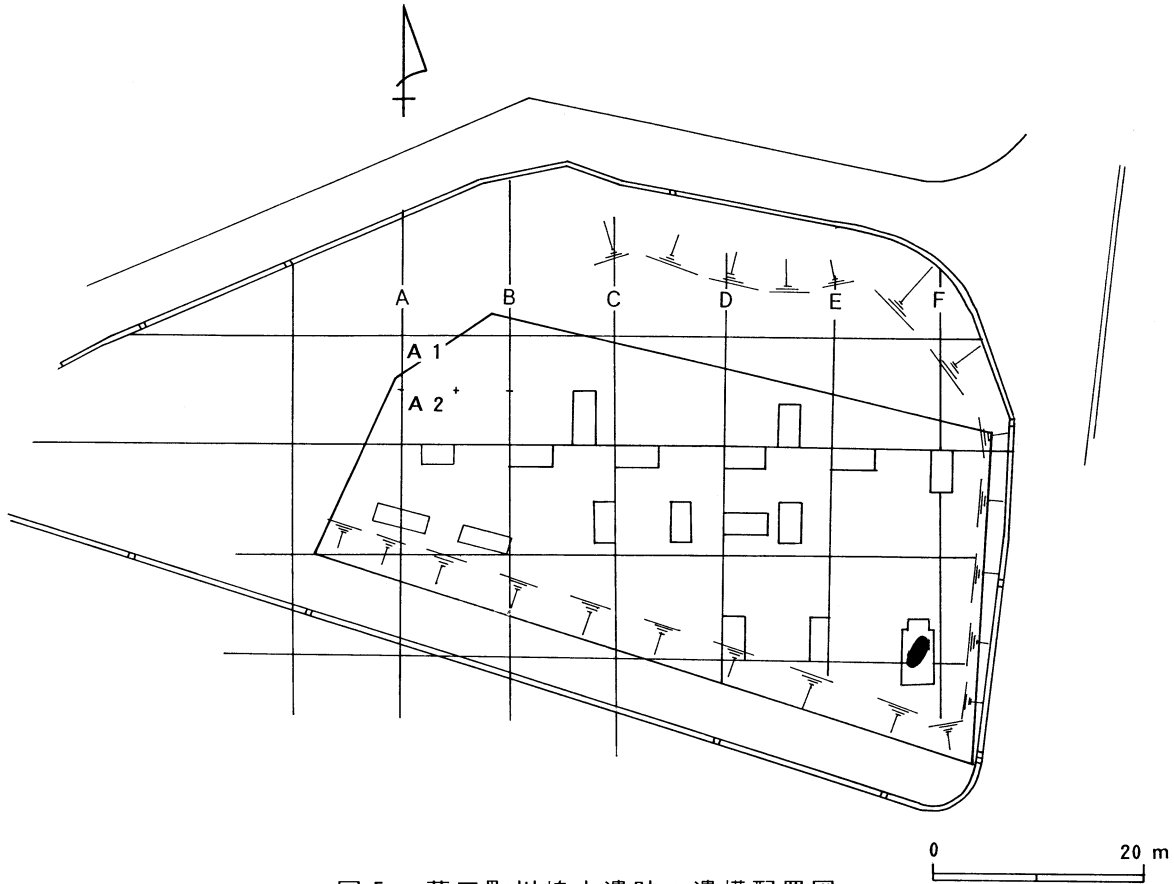


図5 萱田町川崎山遺跡の遺構配置図

第3節 調査の成果

確認調査にて陥穴と想定される土坑に対して本調査を実施したわけであるが、他の多くの例と同じように覆土中からは遺物は検出されなかった。このため時期の特定ができなかった。

また、本遺跡の基本的な土層は、I層；やや褐色を呈する表土層，II層；黒褐色土，III層；褐色土（テフラ層），IV層；暗褐色土，V層；暗褐色土（ローム漸移層），VI層；褐色土（ソフトローム層），VII層；褐色土（ハードローム層）であった。しかしIII層とIV層の分層が難しい地点もあった。

土坑（陥穴）第01号

形状 平面形は幅のない、細長い長楕円状となり、断面形は坑底の立ち上がりがやや丸味を帯びた深いV字形を呈する。また、断面は坑底より0.65m付近で、上場に向かってやや外に開く形状となっている。

規模 上場長軸2.57m×上場幅0.94m

下場長軸2.31m×坑底幅0.10～0.15m， 深さ1.4m

覆土 覆土はロームを中心とするものであり、上層は黒色土が主体を占め、下層はロームを主体とする覆土であった。覆土の色調はロームの多寡により褐色味がやや異なり、この色調を基に6層に分層した。

遺物 本土坑の覆土中からは、遺物は検出されなかった。

その他 本土坑についての性格は、遺構の平面形及び断面形より陥穴と判断した。確認調査においては、縄文時代中期（下小野式，阿玉台式，加曾利E式）の土器片が主体を占めていたが、萱田町川崎山遺跡の他の地点の調査等の出土資料から、断定はさけない。

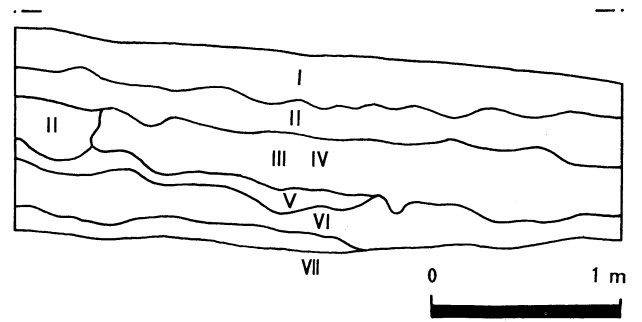
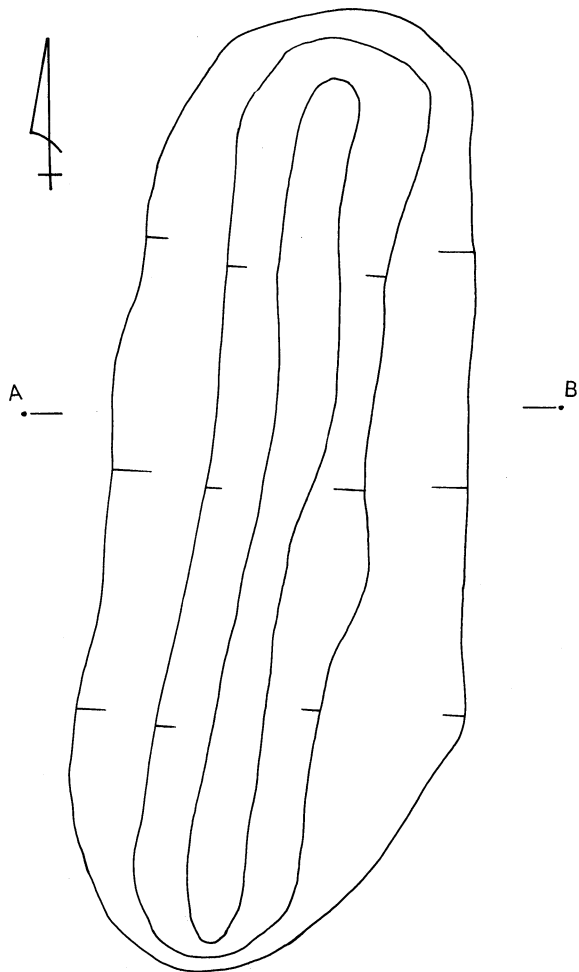


図6 基本土層

土坑第01号土層説明

第1層 黒褐色土層 ロームを少量含む，締まりのある層。腐食土である黒色土を主体とし，暗褐色土との混合層の感じを与える。

第2層 暗褐色土層 ローム粒と黒色土の混合層である。層はしまっている。

第3層 褐色土層 ロームを主体として，暗褐色土を少量含む層で，層のしまりはやや劣り，ボソボソである。

第4層 暗褐色土層 第2層に類似する層で，ローム粒を多く含み，ローム粒が多だけ褐色味が増している層。

第5層 褐色土層 ローム粒とハードローム粒の混合層である。黒色土粒を少量含み，層のしまりは劣りボソボソである。

第6層 暗褐色土層 第5層に類似する層。黒色土粒とハードローム粒の混合層である。層のしまりは劣りボソボソである。

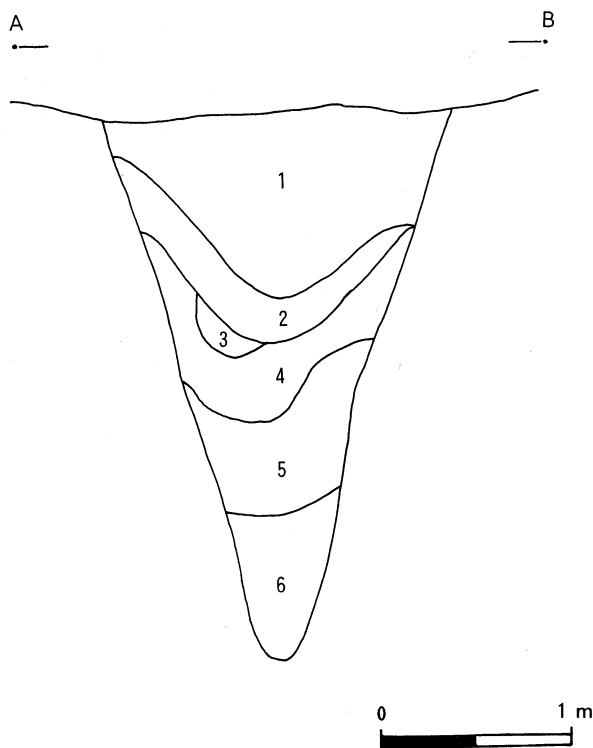


図7 土坑第01号実測図 10

第4節 萱田町川崎山遺跡の調査のまとめ

萱田町川崎山遺跡の所在する地区では大小様々な開発が行われ、発掘調査が実施されている。調査順に a からアルファベット記号を付与することとしている八千代市にあって、ここに報告した調査地区は b 地点と呼んでいる。現在、萱田町川崎山遺跡の調査地点番号は j 地点まで付与されているが、各地点の調査結果から本遺跡は弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代の集落を中心として、旧石器時代、縄文時代にもわたる複合遺跡であると捉えられている。また、出土した石製模造品の未成品などから、古墳時代中期の工房跡も想定される遺跡でもある。

萱田町川崎山遺跡はかつては萱田町遺跡と称され、千葉県文化財センターが行った白幡前遺跡等の萱田遺跡群との混同を避けるため萱田町川崎山遺跡と変更されてきた。その後、川崎山遺跡と呼ばれることもある。この様に遺跡名が変遷することは好ましいものではないが、この状況はこの周辺域において開発に伴う発掘調査が数多く行われていることを意味している。また、一因は近世より隣接した村名として萱田と萱田町が所在することにもあり、歴史的な地名を残すためにも萱田町を冠したという。

ところで今回の川崎山遺跡 b 地点では、縄文時代の陥穴 1 基を調査した。本土坑では坑底付近のオーバーハングはみられず、壁の中間から上場にかけての傾斜が急に立ち上がる様を呈していること等から考えると、比較的早い段階で埋没したのではないかと考えられる。しかし土坑内から遺物の出土が見られず、周辺の土器の出土状況からおおよその時期を推定することも難しい状態である。

同じ台地の新川を直接臨む東側の平坦部縁辺（c 地点）の調査では、6 基の陥穴が検出されているがやはり遺物は出土しなかった。そして包含層等からは早期の井草式の撚糸文系からはじまり、早期後半の条痕文系土器群、前期の浮島系土器群、中期の加曾利 E 3 式、後期の安行 1 式の土器の出土があり、また、本調査区が接する都市計画道路（a 地点）においては前期の十三菩提式も出土している。この様に、陥穴の存在年代が重複しているとき、周辺出土の遺物からの時期の推定は避けたいと考える。

萱田町川崎山遺跡における陥穴の分布であるが、c 地点においては散在であるが 6 基の陥穴の検出に対して、本地点では確認調査の結果でも本土坑しか検出されず、陥穴の分布に偏りがあるのかとも考えられる。しかし八千代市市民会館の建設時には埋蔵文化財の調査は実施されておらず、台地の平坦部縁辺に沿って展開したのかも知れない。いずれにしても、縄文時代にあって本調査地点は集落としての占地ではなかったと考えられるものであり、他の時代を含めて、台地の占地性を知る手掛かりを示しているのではなかろうか。

* 市内遺跡調査事業として国庫補助を得て行った萱田町川崎山遺跡 b 地点の確認調査については、平成 4 年に報告済である。詳しくは下記の報告書を参照されたい。

八千代市教育委員会『千葉県八千代市市内遺跡調査報告 平成 3 年度』1992年

* 八千代市遺跡調査会『萱田町川崎山遺跡』1979年（a 地点）

遺跡名称の変遷の概括的経緯については、本書に記されているので参照されたい。

* 八千代市遺跡調査会『千葉県八千代市川崎山遺跡』1999年（c 地点）

第4章 高津新田野馬堀遺跡

第1節 調査に至る経緯

平成9年9月、稲垣和男氏から八千代市八千代台西3丁目59番1の一部1,585.65㎡について、共同住宅の建設に伴い「埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて」の照会が行われた。照会地は近世の小金牧の南西端の一角を占める地域であり、周知の遺跡の範囲（遺跡番号250）として把握されている地域の範囲内であった。また、近世、近代の陶磁器片を中心に遺物が散布する地区でもあった。

八千代市教育委員会ではその照会を受けて文化財担当者が現地踏査を行い、照会地のなかの一部、約929.19㎡について「遺跡が所在し、協議の必要がある」旨の回答を10月に行った。その回答を基に、事業者と市教育委員会との間で遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、500㎡について確認本調査を実施することとなった。一方、併行して千葉県教育庁文化課と事業者が個人であり、確認本調査の対象も狭く、千葉県の文化財保存事業補助金を得て調査を実施出来ないかとの協議を行い、その結果、補助事業として実施することとなった。また、市教育委員会ではこの様な協議を含めて、調査の諸準備を整えた後に調査を実施することとし、事業者の了解を得た。そして発掘調査は平成10年1月28日より2月12日にかけて市教育委員会が実施した。また、本遺跡では何回かの調査を実施しており、今回の調査地点をc地点と呼ぶこととした。

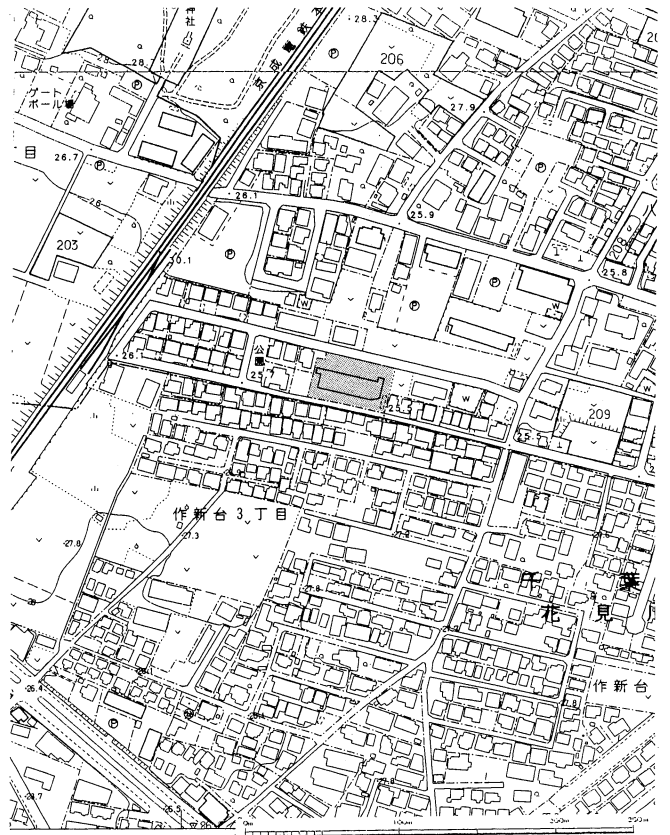


図8 高津新田野馬堀遺跡の位置と周辺の地形

第2節 遺跡の立地と調査の方法

高津新田野馬堀遺跡は千葉市との市境に位置するものであり、今回の調査対象地は八千代市八千代台西3丁目59番1に位置する。現状は畑地であるが、周辺は千葉市側及び八千代市側とも次第に宅地化が進んだ地区となっており、自然の地形が観察しにくくなってきている所である。

本遺跡が所在する地区は、新川の上流である高津川がさらに分流した葦（足）太川の谷頭を北に望んだ標高25～25.5mを測る台地上に所在し、葦太川に対してわずかながら緩い斜面となっている。また、西にはやはり高津川の分流である宮間沢の谷頭が迫っているところでもある。しかも、葦太川が八千代市八千代台南3丁目辺りで大きく西に屈曲する辺りから東へ70から80m程の距離で、東京湾へ流入する花見川の谷頭となっている。このため、本来、水系としては印旛沼に属する八千代市域であるが、この地区は比較的容易に東京湾へ下っていける地域でもある。

調査は重機によって表土を除去した後、遺構の確認と検出に努めた。そして調査区南側に沿って堀が確認され、また、西側には土坑が確認された。調査区中央には確認面において、溝乃至堀状野落ち込みが確認されたが、トレンチによる土層堆積の把握では遺構としては確認できなかった。

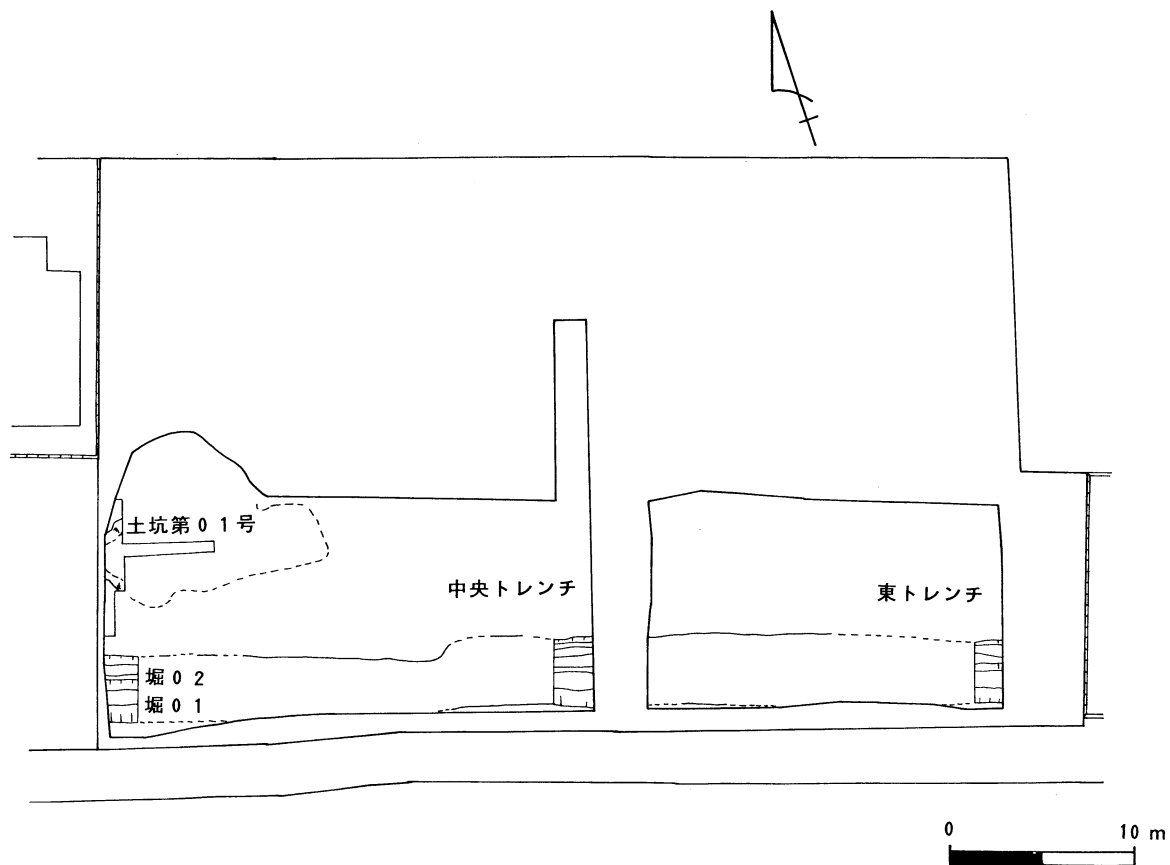


図9 高津新田野馬堀遺跡の遺構配置図

第3節 調査の成果

野馬堀2条と用途不明土坑1基を検出した。野馬除土手は既に失われ、土手は周辺の状況から千葉市との境界である道路上に所在したと考えられる。確認面では堀幅の広く1条の堀のようにみえるが、覆土を除去すると2条の堀が造られていたことが分かった。

また、用途不明土坑は全掘できななかったが、その覆土状況から近代以降の所産と考えられるものであった。

野馬堀

調査区の北に東西に横走して検出した。その南側に野馬除土手が存在したと考えられる。調査はこ野馬堀に対して3か所のトレンチを設定して行い、野馬堀の形状の検出と堆積状況の把握に努めた。覆土除去の結果、堀は2度にわたって掘られていることがわかった。

形状 断面形は箱薬研

規模 堀1 上場 幅 不明×深さ 1.28m×堀底幅 0.5 m

堀2 上場 断面推定上場 幅 約3 m×深さ 1.95m×堀底幅 0.88 m

土層 覆土は色調を基本として、層中に含まれるローム粒やロームブロックの多寡によって分層することとした。層のしまりは全体的に良いものである。また、覆土の堆積状況を見ると野馬堀は最低2度にわたって掘られているようであるが、堀1と堀2の区分が極めて難しい。以下、野馬堀の中央トレンチ部での土層堆積状況を示すこととする。

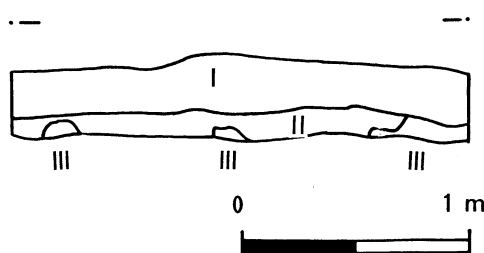


図10 基本土層

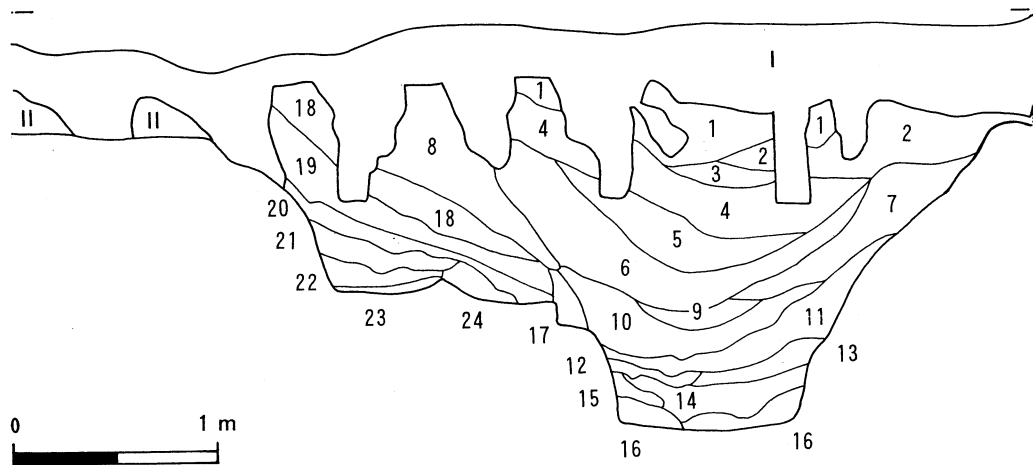


図11 高津新田野馬堀の土層

- | | | |
|-----|----|--|
| 1層 | 表土 | 耕作土 |
| 3層 | 1 | 暗褐色土 ローム粒ロームブロックをやや多く含む層。 |
| 4層 | 2 | 暗褐色土 ローム粒, ロームブロックが少ない層。 |
| 5層 | 3 | 黒褐色土 ローム粒はまばらに, ロームブロックは少ない。 |
| 6層 | 4 | 暗褐色土 黒色土はまばら, ローム, ロームブロックが少ない層。 |
| 7層 | 5 | 暗褐色土 黒色土少し。ローム粒やや多い。 |
| 8層 | 6 | 暗褐色土 黒色土少し。ローム粒少し。層のしまりは良いがやや軟。7層より暗い。 |
| 9層 | 7 | 暗褐色土 黒色土少し。ローム粒まばら。層のしまりは良いがやや軟。8層より明るい。 |
| 10層 | 8 | 黒褐色土 ローム粒少し。やや明るい。 |
| 11層 | 9 | 暗褐色土 ローム粒少し。やや明るい。 |
| 12層 | 10 | 黒褐色土 暗褐色まばら, ローム粒まばら。 |
| 13層 | 11 | 褐色土 ローム粒, ロームブロックが多いソフトローム少ない。 |
| 14層 | 12 | 黒褐色土 ローム粒少し。 |
| 15層 | 13 | 黒褐色土 ローム粒, ロームブロック多い。殆ど褐色土に近い。 |
| 16層 | 14 | 暗褐色土 ローム粒, ロームブロック多い。殆ど褐色土に近い。 |
| 17層 | 15 | 黒褐色土 ロームブロックまばら。 |
| 18層 | 16 | 黒褐色土 ローム粒少ない。層のしまり良く, やや硬さを有する。17層より明るい。 |
| 19層 | | 18層と同層 |
| 20層 | 17 | 黒褐色土 褐色土多い。ロームブロック少ない。しまり良く, やや硬さがある。12層より明るい層である。 |
| 21層 | 18 | 黒褐色土 ロームブロックまばら。しまり良く, やや硬さがある。10層より暗い。 |
| 22層 | 19 | 黒褐色土 ロームブロックまばら。しまり良く, やや硬さがある。21層より明るい。 |
| 23層 | 20 | 暗褐色土 ローム粒少ない。色調はやや暗い。 |
| 24層 | 21 | 黒褐色土 ローム粒やや多いが, ロームブロックは少ない。堀2の覆土。 |
| 25層 | 22 | 黒褐色土 ローム粒, ロームブロックともに多い。堀2の覆土。 |
| 26層 | 23 | 黒褐色土 ロームブロックまばらな層。堀2の覆土。 |

その他 トレンチ部のみの調査のため、野馬堀に伴う遺構、シシオトシ等は未検出である。

備考 先述したが堀1と堀2との境界層を捉えることは難しく、堆積状態から堀1と堀2との層をどのように把握するか考えるところである。覆土の状況から見ると、24層が堀2の立ち上がりとみられ、20層と21層の間で堀1と堀2とに分かれるようである。そうすると2層から20層迄が堀1の覆土であり、21層から23層が堀2の覆土であると把握した。また、締まりは全体的によいが、18層から22層にかけては層に硬さはあるものの、意識的に固められているとは判断できなかったことを付け加えておく。

第4節 高津新田野馬堀遺跡の調査のまとめ

高津新田遺跡野馬堀の調査では、調査区南側に確認面での検出状況は1条であったが、隣りあって2条の堀を検出し堀1と堀2と呼ぶことにした。しかし調査区では野馬堀に伴う、野馬除土手は確認できなかった。また、調査区の西側に用途不明の土坑1基が検出された。遺物は近世、近代陶磁器片が若干出土したが、野馬堀に直接係わるものではなかった。

野馬除土手は遺跡の周辺の状況から、千葉市との市境にあたる調査区外の南にその存在が求められるが、既に削平されて道路となっている。道路を含むその南側付近に野馬除土手があったとすれば、この土手の外側に位置する土手に近い堀1は堀の断面から見ると、地表面での推定される上場幅約3m、深さ1.95m、堀底幅は0.9mと規模は大きい。その外側の堀2は上場は不明だが、深さ1.28m、堀底の幅0.5mと堀というより浅い溝の感じである。この調査で得られた成果は本遺跡の他の調査地点でも同じ傾向を有しており、高津新田野馬堀は統一的に作られたと考えられる。

野馬除土手の外側に掘られた野馬堀は、土層の堆積状況から見ると、土手に対してやや離れた位置に最初に表土から1.3m程度のやや狭い溝が掘られ、後に、土手に近い部分に約1.9m程度の堀が掘られたのではなかろうか。確認面では一条の堀としか把握できないが、基本的に大小2条の堀が前後して掘られたものと考えられる。

先述したが堀1と堀2との境界層を捉えることは堀2の覆土が極めて少なため難しく、堆積状態から堀1と堀2とをどのように把握するか考えるところである。覆土の状況から見ると、繰り返しとなるが、24層が堀2の立ち上がりとみられ、20層と21層の間で堀1と堀2とに分かれている。しかし、もし、堀1が南側の立ち上がり方と同様な構造をもつと考え、覆土のしまり及び硬さも参考とするならば、17層が立ち上がりの壁となってくるのであろうか。そうすると8層及び10層以上が堀1の堆積覆土となり、18層から20層が堀2を埋め戻し、堀1を再度規模を大きくして掘るときに、意識的に埋められていることとなってくる。また、今回の調査では確認できなかったが、堀2と堀1が作られる間に、より広い堀が掘られていたのかもしれない。この2条の堀のうち堀2がどの程度の規模であったかは、堀1がその後堀2を埋めた状態で作られているため定かではないが、埋められたと考えられる土層には硬さはあるが、意識的に固められていたかは判断しかねる層の硬さではあった。

なお、牧の内側の堀の存在については何条の堀が存在するかは定かではないが、かつて残されていた地点でみると、箱薬研の形を有するものが土手から下るように牧内に1条存在していたことを報告しておく。

いずれにしても野馬除土手の外側（牧の外側）において、高津新田遺跡では最低限、大小2条の堀が前後して掘りなおされていることが確認された。しかし調査対象となった高津新田野馬堀遺跡、特に、野馬除土手及び野馬堀は本来、単独のものとして捉えるものではなく近世の小金牧に付随する遺構であり、小金牧としてより広範囲にその遺跡と遺構を見る必要があろう。また、堀に付随する他の遺構が存

在するかも今後、検討すべき問題であろう。

ところで小金牧はその始源は戦国時代に逆上るとされるが、牧の制度や牧の整備がはじまったのは近世に入ってからである。また、時期によって牧の範囲が縮小、拡大され、(庄内牧)高田台牧、上野牧、中野牧、下野牧に分けられている。今回の調査はそのうち下野牧に付随する遺跡・遺構である。野馬除土手、野馬堀がどの時期に築かれたものであるかは、市内の古文書等からは判然としないが、明治時代の小金牧の開墾事業によっても、現在の八千代市域が小金牧の牧内に入ることはなく、その野馬除土手が船橋市や千葉市との境界となってきた。

なお、b地点の野馬除土手がいつ削平され、野馬堀がいつ埋め戻されたかは不明である。明治17年の迅速測図には野馬除土手が書き込まれており、近代陶磁器片等も覆土から出土することを考え合わせると、そう古い時期ではないと考えられる。

註 野馬土手については「野馬除土手が目的や用途から本来の名称ではないか」とのご教示を、鈴木普二男氏(八千代市文化財審議委員)より受けた。各報告書を瞥見すると名称は二つに分かれているようであるが、今後は名称の統一が必要であろうとも考えている。今回は、ご教示をうけて「野馬除土手」とすることとした。

参考文献

- 八千代市立郷土博物館『小金牧と狩り』(平成12年度第2回企画展解説図録) 2000年
八千代市教育委員会『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告—平成3年度—』1992年
八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史 資料編 近世II』1994年 八千代市

第5章 尾崎群集塚

第1節 調査に至る経緯

平成10年1月、千葉県教育庁文化課が委嘱する千葉県文化財保護指導員の巡回結果から、「八千代市大和田新田字平作 855番1に所在する尾崎群集塚（遺跡番号 143）の一部について損壊を被っており、適切な措置を講じるように」との指導が、千葉県教育庁文化課より八千代市教育委員会に行われた。早速、市教育委員会の文化財担当者が現状を確認した後、土地の所有者である高橋岩男氏から事情を聞き、の取り扱いについて協議を行うこととなった。

尾崎群集塚に対する土地の改変の理由は地区のゴミ置場の設置との事であった。しかし既に塚の一部について土が削り取られていた現状から、緊急に八千代市の単独事業として市教育委員会が発掘調査を行うこととなり、その取り扱いの結果について千葉県教育庁へ報告した。

市教育委員会は調査の為の事前準備も緊急に整える事とによって、調査を平成10年2月10日より2月23日にわたって実施した。

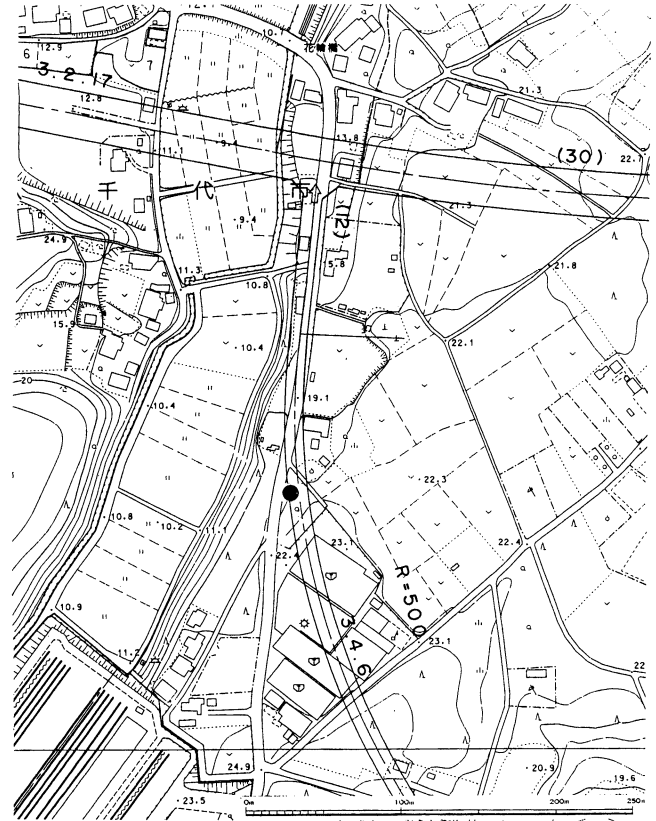


図12 尾崎群集塚の位置と周辺の地形

第2節 遺跡の立地と調査の方法

尾崎群集塚第01号塚は新川の支流である桑納川から南に入り込む花輪川を西に臨む、標高22mの台地平坦部の縁辺に所在する。水田面との比高は11mを測る。尾崎群集塚が築造される台地の全体の形状は、東西とも桑納川から入り込む谷津に解析されて、北東方向に位置する桑納川に向かって舌状に突き出る台地であり、群集塚はこの台地の中央平坦部から西側に点在している。第01号塚の現状は林地の中であったが、周辺は畑地や牛の飼料畑が大きく広がり、また、民家点在し、南西側には東葉鉄道の車輛基地（八千代車庫）等が迫っている地区である。

本調査の対象面積はゴミ置場として一部削り取られた部分を含めて38㎡と小規模であり、塚の全体を調査の対象とはしなかった。調査は塚の測量から開始したが、緊急性や諸般の事情から公共座標や水準にそった測量は実施できず、今回の調査に限っての仮設の原点を設置して測量した。塚の測量では等高線を20cm間隔として測量図を作成した。

その後、削平を被る塚の下端から周縁に向けてにトレンチを設定し、塚の封土層を捉えることを主眼にして調査を進めた。塚の中心部の封土層を捉える為のセクションの位置の決定後、トレンチの発掘と削平された部分の残存封土の除去を行い、遺構と主体部の検出に努めた。

第3節 尾崎群集塚の調査の成果

調査によって縄文時代（中期，後期）の土器片が出土しているが，塚に伴う遺物は出土しなかった。また，塚にはトレンチにおいて周溝が確認できた。

第01号塚

形状 方形塚（隅丸方形を呈す）

規模 一辺 14 m×高さ2.9 m

封土 封土は，色調及び主体となる包含物で分層した。ローム，黒色土，暗褐色土が積まれた封土の主体となっている。また，築造時の祭祀の為か，封土の下部には焼土の分布も多くなっている。封土の締まり全体的によいものである。

第1層	表土層	木根等が多く，やや層の締まりのかける層である。			
第II層	黒色土層	サラサラとした土質であり，層の締まりはやや固さを有する。			
第III層	暗褐色土層	やや粘性がある層			
第1層	暗褐色土層	暗褐色土を主体とする層	第21層	褐色土層	ロームを積んだ層
第2層	黒色土層	黒色土を主体とした層	第22層	褐色土層	ロームを積んだ層
第3層	褐色土層	ロームを積んだ層	第23層	褐色土層	ロームを積んだ層
第4層	黒色土層	黒色土を主体とした層	第24層	暗褐色土層	他の同色層に比べても層の締まりが劣る，フカフカな層
第5層	暗褐色土層	黒色土若干多い	第25層	暗褐色土層	焼土粒，ローム多い
第6層	黒色土層	黒色土を主体とした層	第26層	褐色土層	ロームを積んだ層。焼土粒を多く含む，黒色土少量含む層
第7層	黒色土層	黒色土を主体とした層	第27層	暗褐色土層	暗褐色土を主体とする層
第8層	褐色土層	ロームを積んだ層	第28層	黒色土	焼土少量含む。
第9層	黒色土層	黒色土を主体とした層	第29層	赤褐色土層	焼土粒主体
第10層	黒色土層	黒色土を主体とした層	第30層	赤褐色土層	焼土粒主体
第11層	暗褐色土層	暗褐色土を主体とする層	第31層	黒褐色土層	黒色土と暗褐色土の混合したような層，やや締まりに劣る
第12層	黒色土層	黒色土を主体とした層			
第13層	暗褐色土層	暗褐色土を主体とする層			
第14層	黒色土層	黒色土を主体とした層			
第15層	黒色土層	黒色土を主体とした層			
第16層	暗褐色土層	暗褐色土を主体とする層			
第17層	暗褐色土層	暗褐色土を主体とする層			
第18層	褐色土層	ロームを積んだ層。			
第19層	黒色土層	黒色土を主体とした層			
第20層	暗褐色土層	黒色土の割合多い			

付帯遺構 周溝 幅1.3 m×深さ0.2 m

トレンチ部分で確認されたのみであり，全周するか，一部であるかは不明である。また，周溝の溝底は塚寄りに5 cm前後の緩い傾斜をもってやや深くなるが，全体的に平坦な溝底である。

遺物 塚に係わる遺物は今回の調査対象地区では出土しなかった。

封土からは縄文時代の土器である加曽利E，加曽利Bの小破片が若干出土しているのみである。

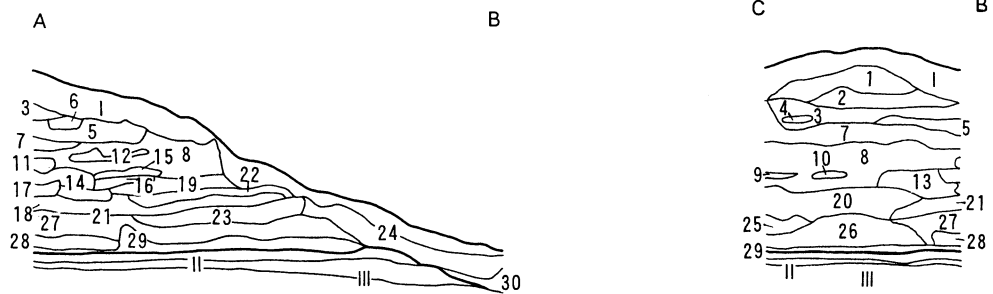
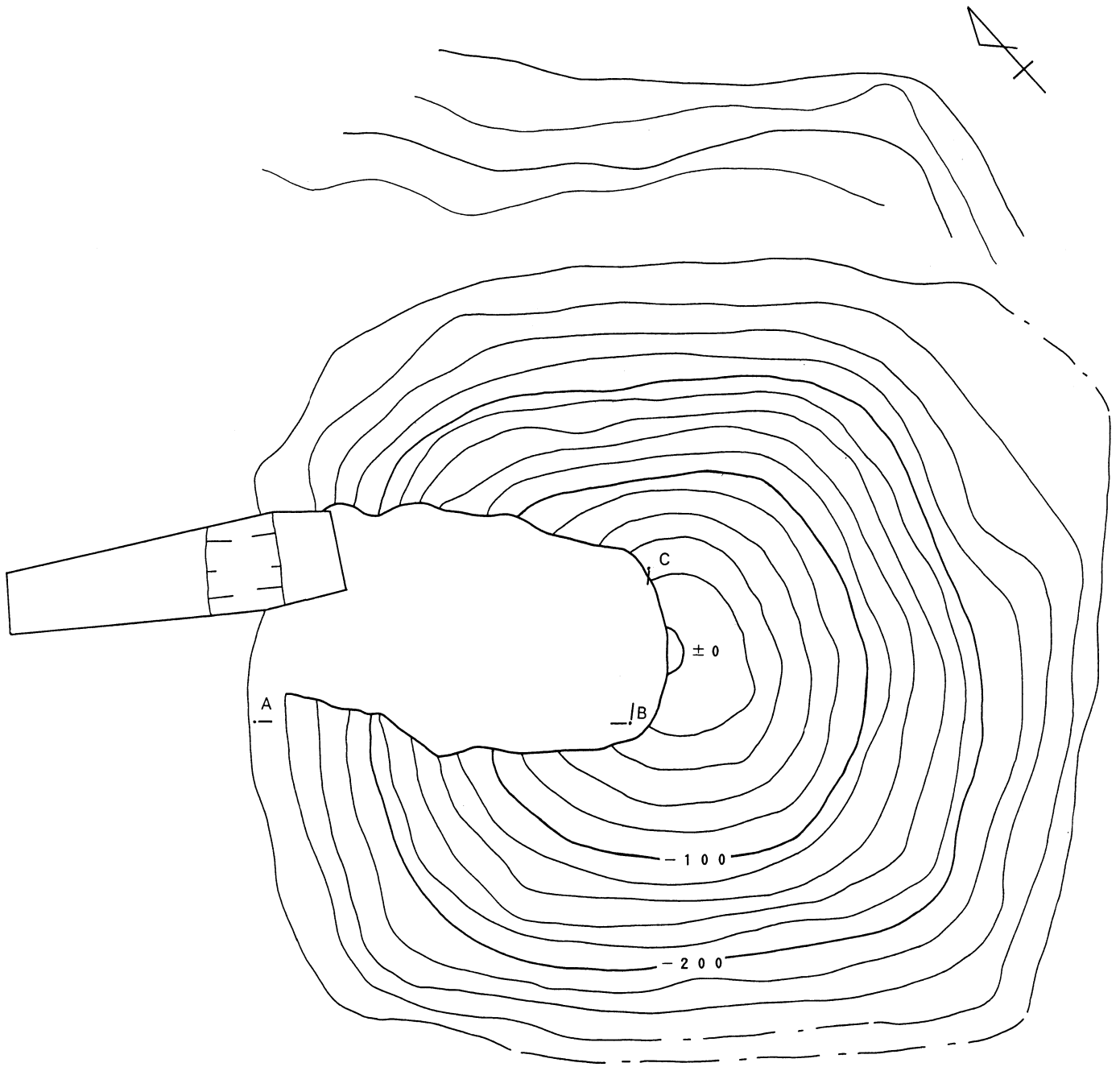


図13 尾崎群集塚第01号塚の測量図



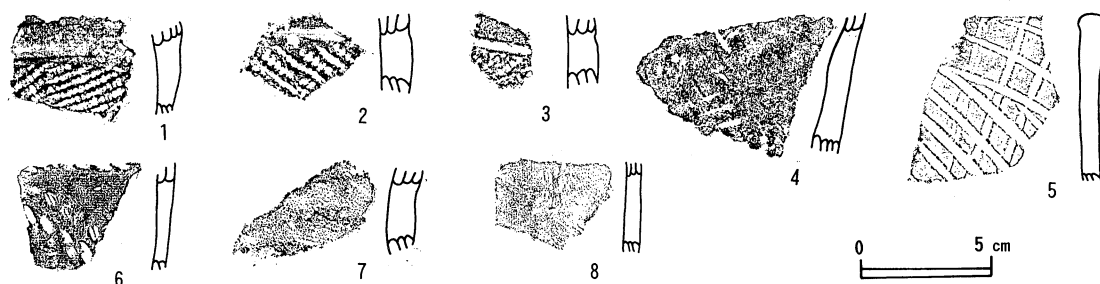


図14 尾崎群集塚第01号塚出土の遺物

第4節 尾崎群集塚の調査のまとめ

尾崎群集塚第01号塚の調査は塚の全体を調査対象とした分けではなく、本調査面積がゴミ置場とする為の38㎡という極めて限定された調査面積であった。その調査の中では残念ながら塚に係わる遺物が検出されず、また、主体部も今回の調査では確認されなかった。このため築造時期が中世後半なのか近世なのかは明らかにならず、主体部も確認出来なかったため築造された目的を知る手掛かりも得られなかった。しかし塚の構造を知る資料を得た点で、成果を上げたものと考えている。

第01号塚は削平された部分以外は現状を良く残し、視覚的にも方形塚として捉えられるものであったが、測定の結果、形状は一辺14m、高さ2.9mといった小規模な方形塚であることが確認された。また、周溝の存在もトレンチ部分によって確認されたが、幅1.3m、確認面からの深さが20cmと、塚の規模からしてやや浅いものである。

塚の封土を見るとロームの積み上げが多いことから、周溝を掘っただけでは到底充足できるとは考えられず、周辺域においてロームを得るために人為的に掘らざるを得なかったことが容易に想定できるものである。しかもローム以外の他の封土の主体土である黒色土や暗褐色土は、八千代市域の山林部では通常に堆積する土壌であり、これらの封土が塚の周囲からのかき集めであったかは今回明らかにすることができなかったが、その土量からしてそう遠くない周辺域から採取・運搬し、積み上げていったと想定できるものであった。そして封土中からの縄文土器の出土は、包含層を壊して積み上げる封土を集めていたと言えよう。

しかし、今回の調査の大きな成果は、塚を造る以前の地山である基本土層の第Ⅱ層の上に、焼土層が塚の外縁から中心部にかけて確認できたことである。また、封土の上層部では焼土が混入していても少なく、封土の下層部には焼土を多く含む封土層が検出された。そしてこの焼土が、もし主体部が存在したならば、その係わりでどのような意味を持つかを考える必要が生じてくるのではないだろうか。また、これらの焼土は、塚の築造時に火を伴う何らかの祭祀が行われていたことを窺わせるものである。

八千代市域の塚の調査ではこの様に多量に焼土が検出される例がなく、また、塚の築造年代の殆どが近世と想定される市域にあって、この多量の焼土が時期的な差なのか、地域的な差なのか、築造目的の違いなのか、今後の資料のまつほかないのが現状である。

ここで少し吉橋地区に触れてみると、中世の村落がどのような土地領域を有していたかは分かっていないが、近世村落にてらしてみると尾崎群集塚は吉橋村と大和田新田の村境付近に築造されており、大和田新田から吉橋に抜ける道から奥まった山林部に点在している塚群である。現在の道からは見えづらい位置に築かれて所在する。そして尾崎群集塚は吉橋・尾崎集落の後背地または村への入り口といった場所に築かれており、集落との位置からして金塚所在塚の所在と似た傾向がうかがえる。

第6章 神久保寺台遺跡

第1節 調査に至る経緯

平成9年9月、星野よね氏から八千代市神久保寺ノ台73番2、75番1の3,569㎡について、資材置場として使用するとして「埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて」の照会が行われた。照会地は、神久保寺台遺跡（遺跡番号7）と把握される周知の遺跡の範囲内にあった。この照会を受けて、八千代市教育委員会の文化財担当者は現地踏査を行った。

現地の状況は山林であり、表面観察では土器片の散布などは確認できなかったが、周辺の畑地では土器片の散布が認められ、「遺跡が所在し、遺跡の取り扱いについて協議の必要がある」旨の回答を行った。その後、進入路の敷設部分を含めて4,513㎡と対象面積が4,513㎡と増加したが、事業者と協議を重ねるなかで確認調査を実施することとなった。

一方、併行して市教育委員会は千葉県教育庁文化課と、事業者が個人であることを勘案して千葉県の文化財保存事業補助金を得て確認調査を実施することで協議を行い、この県費補助事業として調査を行うこととなった。また、この様な手続きの含めて諸準備を整えた後に確認調査を実施することを事業者との協議のなかで了解されており、確認調査は平成10年3月2日から3月13日にかけて市教育委員会が実施した。

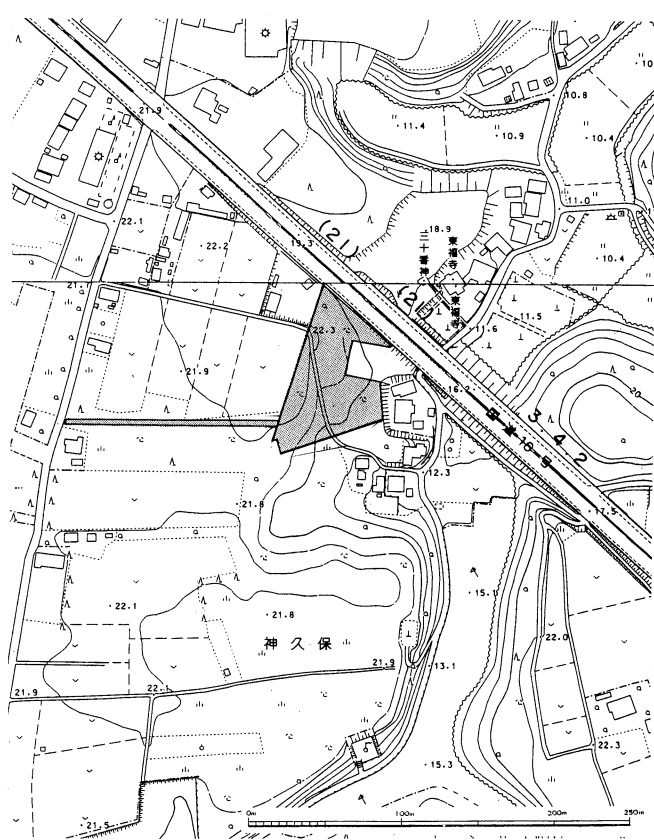


図15 神久保寺台遺跡の位置と周辺の地形

第2節 遺跡の立地と調査の方法

神久保寺台遺跡は八千代市の北部に位置、八千代市神久保寺ノ台73番2他に所在する。現状はモウソウチク等を中心とした竹林と山林であり、一部は畑地として利用されていた。また、調査区の北側には国道16号線が台地を切り開いてとおっている。

本遺跡は、八千代市と印西市の市境となって西から東へ流れて印旛沼へ流入する神崎川を大きく北に眺み、さらに神崎川から南に入り込んだ谷津を東に臨む、標高19～21mを測る台地上平坦部及びその縁辺に立地する。水田面との比高は7mから9mを測り、遺跡が所在する台地からはやや急な傾斜で谷津に下りる地形である。しかし、調査対象地の北西や北東域は調査区との境で削平されており、また、中央部や南西域では人為的な段差が認められた。

確認調査は照会地の全体の形状にそって方眼の基準杭を設定し、5mの小グリッドによるグリッド・トレンチにて行うことを基本とした。しかし、方眼から外れる調査境界域や進入路については、任意にトレンチを設定して表土除去を行い、遺構の検出に努めた。また、遺構が検出された場合は、そのおおよそ規模を確認するため拡張することにした。その結果、次に概要を報告する成果を得ることができた。

第3節 調査の成果

調査の対象面積4,513 m²に対して、調査面積は451m²であった。また、旧石器時代への確認調査も併せて実施し、下層のローム層に対して4 m²の確認調査を実施した。

その結果、竪穴住居跡3軒（弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代各1軒）と中世と考えられる堀跡1条、時機不明の土坑1基を検出した。

竪穴住居跡や土坑検出は調査対象区の北側にまと

まり、集落の調査区外への展開が想定される成果を得た。また、遺物としては縄代中期（阿玉台，加曾利E）の土器片や弥生後期の土器片，土師器（古墳時代前期，平安時代）の出土をみているが、いずれも遺構調査は行ってないため破片である。

調査区の基本土層は，I層が表土層（暗褐色を呈する），II層は黒色土，III層は暗褐色土，IV層は暗褐色土（ローム漸移層），V層は褐色土（ソフトローム層）となっている。

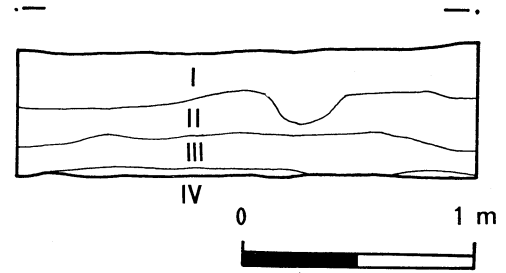


図16 基本土層

第01号住居跡

調査区の北側において検出した。その規模・形状等を把握するためにトレンチを拡張した結果，平面の全体を確認することはできなかったが，小判形を呈するものと想定される竪穴住居跡と捉えられた。しかしトレンチの拡張を行っても，住居跡の全体を捉えることはできず，規模等は把握できなかった。また，遺構確認面での遺物出土状況等から，弥生時代後期の竪穴住居跡と想定した。

第02号住居跡

調査区の北側において検出した。その規模・形状等を把握するためにトレンチを拡張した結果，平面の全体を確認することはできなかったが，平面形は隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。しかしトレンチの拡張を行っても，住居跡の全体を捉えることはできず，規模等は把握できなかった。また遺構確認面での遺物出土状況から，古墳時代前期の竪穴住居跡と想定した。

第03号住居跡

調査区の北側において検出した。その規模・形状等を捉えるためトレンチを拡張した結果，平面形は隅丸方形を呈し，北西壁にカマドを設けた竪穴住居跡である。しかしトレンチの拡張を行っても，竪穴住居跡の全体を捉えることはできず，規模等は把握できなかった。また，遺構確認面での遺物出土状況等から，平安時代の竪穴住居跡と想定した。。

第01号土坑

調査区の北東地区において検出した。その規模・形状等を捉えるためトレンチを拡張したが，時期や用途等については不明である。

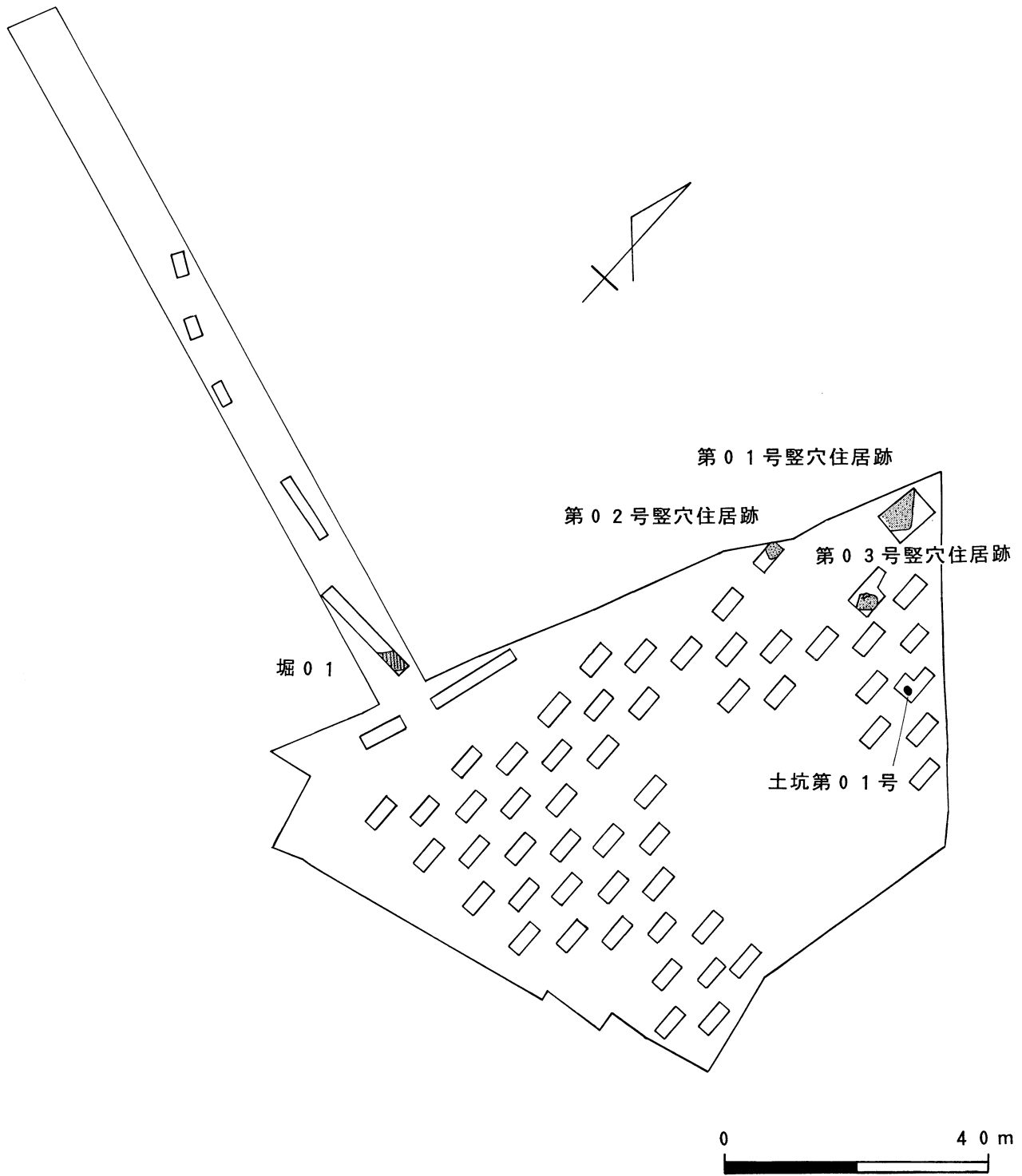


図17 神久保寺台遺跡の遺構配置図

堀01

調査区の主体から道路につながる進入路予定地に設定した、5トレンチにおいて検出したものである。トレンチにかかった部分のみ調査を行ったが、その規模等から溝ではなく堀と判断した。また、トレンチ内の調査した部分において堀底の幅を確認しようと調査を行ったが、残念ながら今回の調査では確認できずに終わった。

規模 上場 幅 約1.30m以上
 深さ 1.07m
 下場 幅 未確認

覆土 色調および包含物やその多寡によって、9層に分層した。包含物の主体はローム粒であった。また、堀底直上層以外の層は全体的に層にしまりがあった。

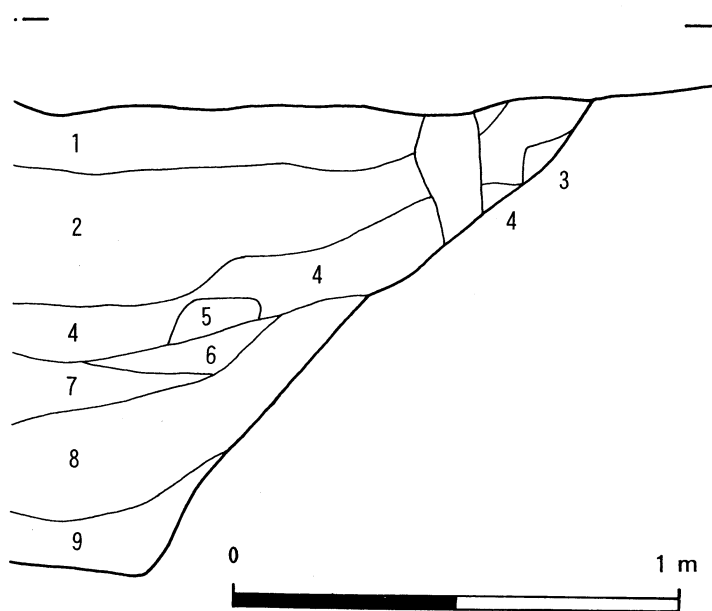


図18 堀01の土層

- 1層 暗褐色 ローム粒，黒色土粒の混合層であり，しまりある層。
- 2層 黒褐色 ローム粒を斑状に含み，しまりある層。
- 3層 褐色土 ローム土
- 4層 暗褐色 黒色土少量含む。極めてしまっている層。
- 5層 褐色土 ロームと暗褐色の層，しまっている層。
- 6層 黒褐色 ローム粒や2～3mm程のローム粒を混入する。凄くしまっている。
- 7層 暗褐色 ローム粒含み，極めてしまっている層。
- 8層 褐色 ロームを主に，暗褐色土を混入する，極めてしまっている層。
- 9層 暗褐色 ロームと黒色土の層，ややぼそぼそである。

備考 本遺構についてはトレンチ内の調査であったため、その目的や用途等の詳細については明らかにできなかった。その可能性として中世の所産としたが、正確なことは今後の調査にまちたい。

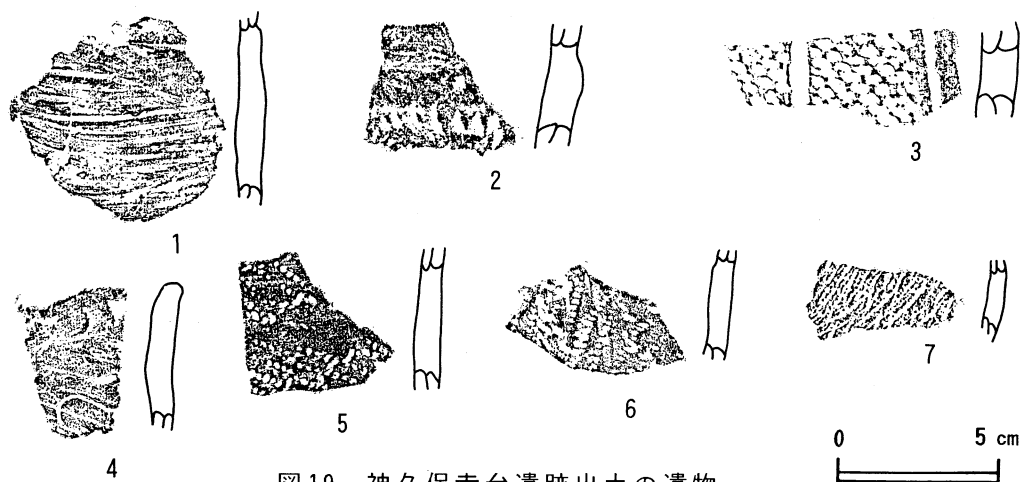


図19 神久保寺台遺跡出土の遺物

第4節 神久保寺台遺跡の調査のまとめ

今回、神久保寺台遺跡に対して行った確認調査では、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代の竪穴住居跡が各1軒、中世の所産と考えられる堀跡1条、時期不明の土坑1基が検出された。

竪穴住居跡の検出によって本遺跡が確認された各時代の集落跡として捉えることができた分けであるが、確認調査によって得られた竪穴住居跡の検出位置はいずれの時代も調査対象区の北側にそれぞれ所在し、調査区北側から地区外にかけて集落の展開が十分想定されることが調査の成果として得られた。そして現在は国道16号線によって北側の台地が分断されるが、引き続き台地にもその存在の可能性があると考えられ、より広い範囲にわたって集落が展開されていたことが想定できた。また、神久保地区での集落遺跡の確認は初めてであり、今後のこの地区における原始・古代を考える上での新たな知見が加わったと言えよう。

また、進入路の調査区5トレンチから検出された堀跡は、その覆土等から中世の所産として捉えた。しかしトレンチ内の確認でありその堀の範囲や規模等は明らかにできず、また、中世としてもいつの時代の所産なのかも明らかにできなかった。特に、この堀跡が城館跡に伴うものであるのか、また、境界のための堀なのかも不明となっており、今後の課題として残されている。

八千代市の城館跡については、1970年代に八千代市中世館城址調査団が市内の分布などについて調査を行っている。その時、米本城跡や高津館跡等に対しては測量調査を併せて実施し、1976年にその報告が行われた。しかしその中には、神久保地区での城館跡の所在は報告されていない。地元でも城館についての伝承等は伝わっておらず、城館に係わるであろう字名等も知られていない。このような資料から、現段階ではこの堀が城館に伴うものとは考えにくい状況でもある。

また、他の目的で掘られたとしてもその目的を明らかにできなかったことは、文書等の他の資料も参考にして考えて行くべきかもしれない。

八千代市の北にある神久保地区は市街化調整区域として開発の少ない地区であり、それに伴い発掘の調査例が少ない地区でもある。現在、神久保地区の遺跡の多くが表面観察から遺跡の性格などを知る手掛かりを得ているが、今回の調査によって神久保地区での考古学的な資料が得られたと言えよう。一方で、本遺跡の近隣、東側約1.5～2km程の位置には弥生時代中期宮ノ台期の環濠集落である田原久保遺跡や、古墳時代前期の集落跡である佐山台遺跡、終末期古墳の真木野古墳等が所在する、「学園都市」として開発に先行して調査が行われた北部遺跡群がある。この遺跡群と本遺跡がどの様に係わってくるのか、神久保寺台遺跡においては本調査を実施していないため明確な資料が得られなかったが、将来の課題として検討すべき事項であろう。

以上、神久保寺台遺跡の調査の成果について若干のまとめを行ったが、遺跡の調査例が乏しい地区にあって近隣での比較例が少ないことが、ネックとなっている。相対として今後の調査例の増加を待ちたいと考えている。

なお、この確認調査の結果を受け、八千代市教育委員会では照会者に当該用地のうち竪穴住居跡、堀跡、土坑の所在する386㎡については、開発工事等を行う場合には本調査が必要なことを含めて、引き続き協議が必要なことを伝えた。その後、その取り扱いについて市教育委員会と照会者との間で協議を行った結果、その協議の対象となる386㎡の地区については事業者と八千代市教育委員会の間で協定書を取り交わしたうえで、保存することとなったことを報告しておく。

第7章 稲荷前遺跡

第1節 調査に至る経緯

平成10年2月、新日本建設株式会社より八千代市上高野字稲荷前1130番1，他の7,081㎡について宅地造成を事業目的として「埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて」の照会が行われた。これを受けて八千代市教育委員会の文化財担当者は現地踏査を行い，土師器片等が散布しているのを確認した。また，周知の稲荷前遺跡（遺跡番号232）の範囲内であること，そして，過去，別事業の照会で，遺跡が所在する旨の回答を出している地区であることなどから，当初の計画どおり工事を行うのであれば調査が必要であると判断した。その旨を事業者に回答し，事業者との協議を重ねた。協議の結果，発掘調査を実施することもやむを得ないこととなった。

発掘調査については，事業主体が中小企業であること，事業の緊急度などを考慮し，八千代市教育委員会が不特定遺跡発掘調査事業として行うこととなった。

そして事業者から土木工事の届け出が提出され，調査の準備作業を進めた。準備の整った平成11年3月18日から調査に着手し，平成11年月3月31日にかけて，市教育委員会が実施した。

第2節 遺跡の立地と調査の方法

本遺跡は，佐倉市と八千代市の市境となる井野川の西岸，標高26mを測る台地平坦部に所在する。台地南側は東西に走る小支谷によって区切られている。水田面との比高は約4mである。

周辺の遺跡としては，本遺跡の西方に縄文時代前期の土坑群及び包含層を検出している二重堀遺跡，さらに，その南方に縄文中期の竪穴住居跡及び土坑群を検出している新林遺跡が展開している。また，遺跡北東に入る小支谷を隔てて，上谷津台南遺跡が所在し，縄文時代早期と考えられる陥穴，数基が調査されている。さらにその北方には，上谷津台遺跡が展開する。地形的には小支谷が複雑に入り込み台地を細かく区画しているため遺跡が多く分かれる。詳細は，各遺跡を個別に分析する必要があるが，稲荷前遺跡を含め，これら5遺跡は地元では上高野原と呼ばれる地区に所在し，一般的傾向として，縄文土器と奈良・平安時代の土師器片が比較的多く散布し，発掘調査からは主に土坑群を中心とした縄文時代の遺構が検出され，奈良・平安時代の遺構検出例が少ない。

調査区の現況は畑で，南側にやや傾斜しているものの，全体的には，ほぼ平坦といえる調査区であった。本遺跡の調査は今回が初めてであり，a地点となる。また，平成11年には，本調査区北側がb地点として調査され，土坑 基を検出させている。

確認調査は公共座標系に沿う形で基準杭を設定し，基本的に10m単位のグリッドを設定した。各グリ

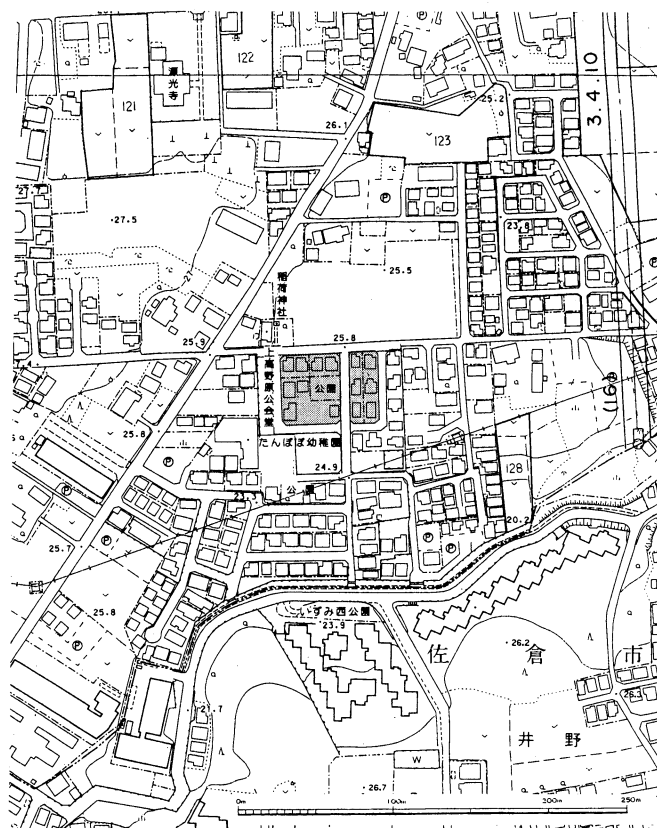


図20 稲荷前遺跡の位置と周辺の地形

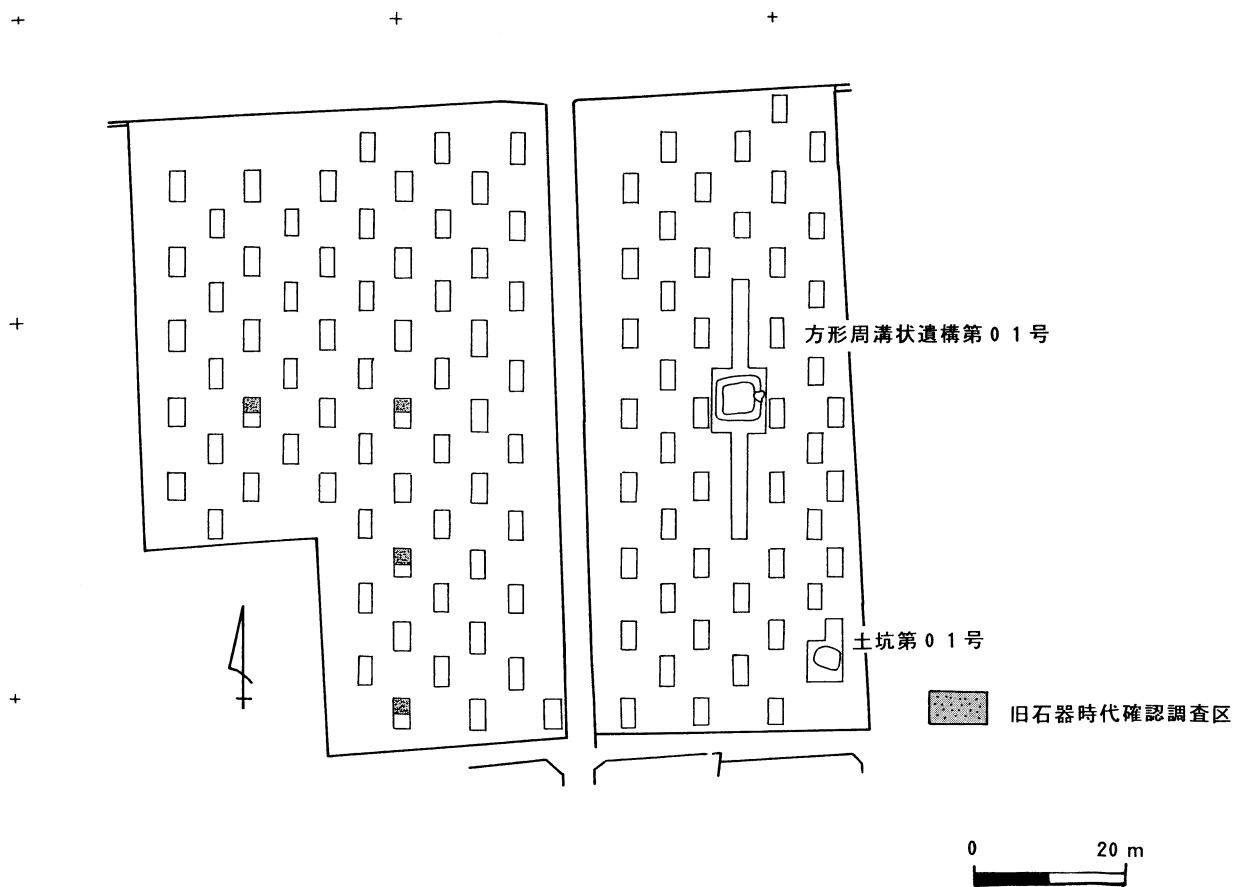


図21 稲荷前遺跡の遺構配置図

ッド北西隅に2 m×4 mのトレンチを設定し、重機及び人力による掘削を行った。遺構の検出状況等を勘案しながら、更にトレンチを追加し、拡張しながら遺構の検出に努めた。

基本的な層序はⅠ層；表土層，Ⅱ層；ソフトローム層，Ⅲ層；ハードローム層で、黒褐色土層，暗褐色土層及び新期テフラ層等は検出されなかった。遺構確認作業はⅡ層上面で行った。

本調査については、検出遺構が少なかったため、適宜、必要な部分を拡張し、遺構調査まで行い調査を終了した。下層調査については、2 m×2 m

のトレンチを5ヵ所、計20㎡について確認のためハードローム層まで下げて調査を行ったが、旧石器時代の遺物を検出することは出来なかった。

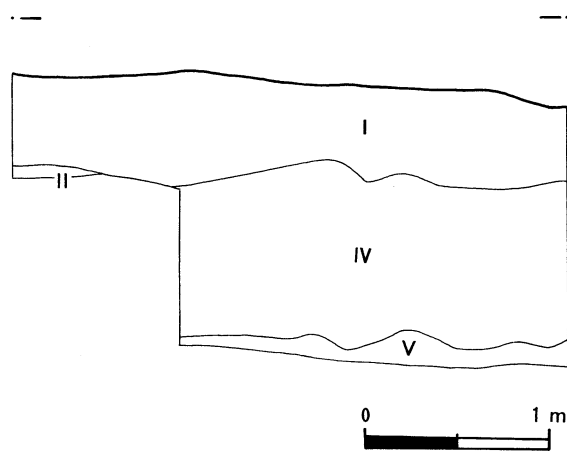


図22 基本土層

第3節 調査の成果

調査の結果、縄文時代早期の炉穴1基、奈良・平安時代の方形周溝状遺構1基、時期不明の土坑1基を調査することができた。遺物については、包含層を検出することはできず、縄文土器を中心に奈良・平安時代の土師器などが少量、出土したのみであった。

炉穴第01号

調査区東側のほぼ中央に位置する。後述する方形周溝状遺構第01号の底面の精査時に検出された。底面の精査時に焼土を検出し、焼土を除去したところ別遺構として炉穴第01号が存在することが確認できた。新旧関係については、方形周溝状遺構第01号の覆土掘削時の土層観察と底面精査時の観察から炉穴第01号の方が古く、方形周溝状遺構第01号の方が新しいものである。

本遺構の平面形態は不整形で、長軸は約1.48m、短軸は最大軸0.98m、最小軸0.61mである。深さも底部に凹凸があり、一様ではない。検出面からの深さは最大で0.53mとなる。断面形態として特徴的なことは、本遺構東側の立ち上がり、オーバーハングしていることである。その他の壁については、ほぼ斜めに直線的に立ち上がっている。平面形態・断面形態及び覆土の除去時の状況から本遺構は先後関係は示せないが、3つの炉穴が順次作られていったものと考えられる。

壁はソフトロームであるが、しっかりとした立ち上がりを持つ。底面についてもソフトロームの底部でしっかりとしている。小ピット等の付属施設は無く、全体的に凹凸があり、平坦な部分が少ない。壁及び底面とも火熱を被って劣化した様相はあまり見受けられなかった。

遺構内覆土については、調査進行上の理由で土層観察図を作成することができなかったが、おおむね1層；焼土を多量に含む暗褐色土、2層；暗褐色土を主体に多量のロームと少量の焼土が混る土層に分層することができる。1層は遺構を検出した上層の僅かな部分であり、覆土の大部分は2層で構成されていた。以上の観察から、堆積状況は、人為的な埋め戻しか、あるいは極めて短期間に埋没したものと考えられる。3基あったと考えられる炉穴が同時に廃絶されたのか、あるいは、それぞれに新旧関係にあるのかは、覆土の観察からは判然としなかった。

出土遺物については、遺構覆土下層や底面近くで、縄文土器と思われる細片が出土しているが、時期を特定するには至らなかった。

なお、検出状況や平面・断面形態、規模、覆土や出土遺物等から、縄文時代早期後半と考えられる。

土坑第01号

調査区南東隅に位置する。Ⅱ層のソフトローム上面で遺構を確認を行い、必要に応じトレンチを拡張し、土坑を検出したが重複する遺構はなかった。

平面形態は、不整形であるが、ある程度、隅丸長方形を意識してつくられていると考えられる。長軸は約3.02m、短軸は約2.33mで、長軸方向は、ほぼ北西方向に振れている。確認面からの深さは、約16cmで、掘り込みが比較的浅い土坑であった。

坑底はソフトロームのしっかりとした底面で、ほぼ平坦である。硬化面とまではなっていないが、ある程度硬く、踏みしめられた様相を呈していた。柱穴等の付属施設は検出されなかった。壁についてもソフトロームのしっかりとした壁で、坑底から斜めに直線的に立ち上がってゆく。

遺構内の覆土は、黒褐色土をを主体とした土が1層のみ充填されたようになっていた。堆積状況が自然堆積によるものか人為的なものによるものか判然としないのだが、全体的に土質が均一なことから、自然堆積によるものと考えるのが妥当かもしれない。

遺物については、出土しなかった。出土遺物がないことから、時期を特定していくのは困難であり、手掛かりになるもののに決定打を欠くなかで本遺構は時期及び用途不明の土坑としておきたい。

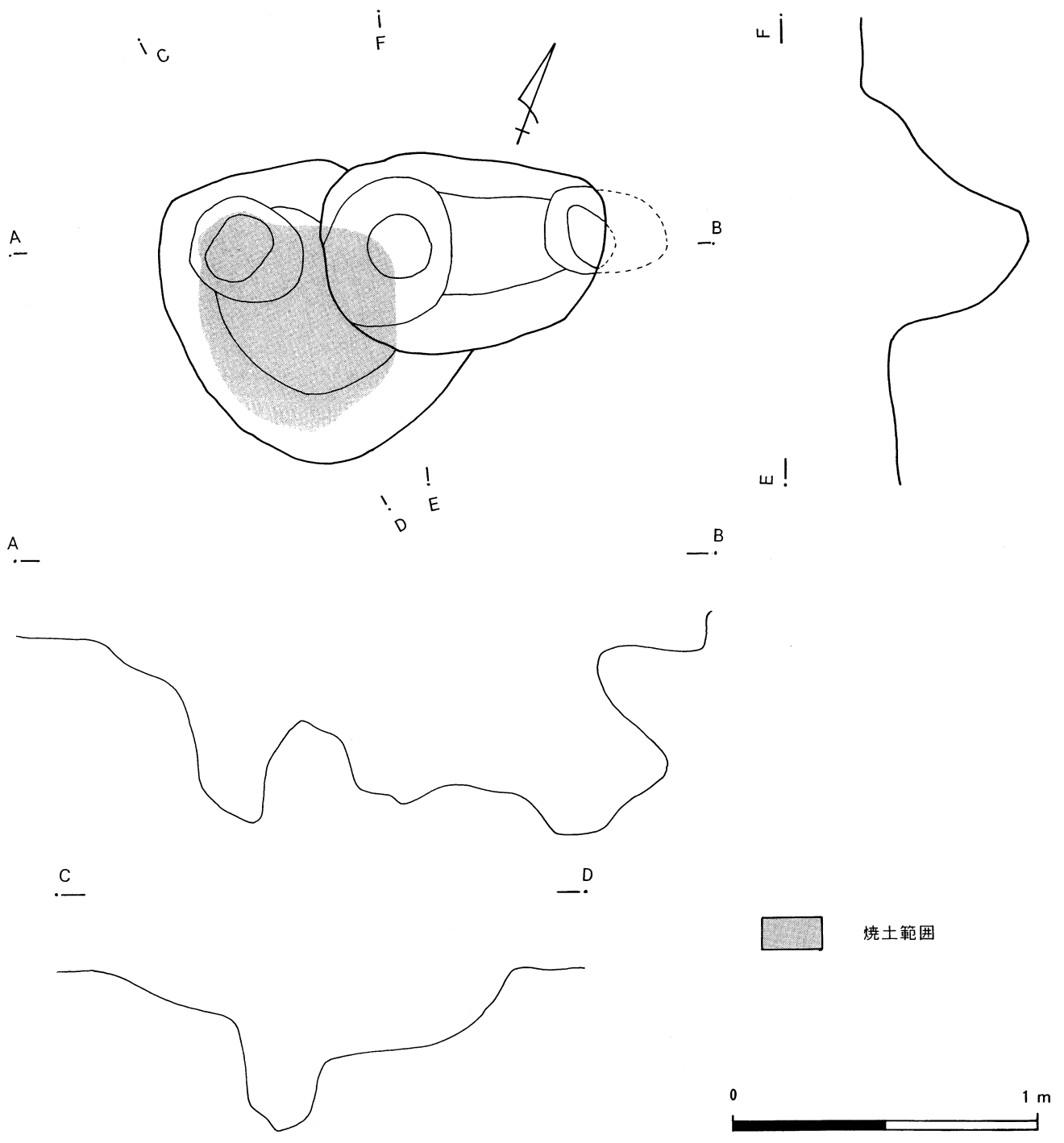


图 23 炉穴第 01 号实测图

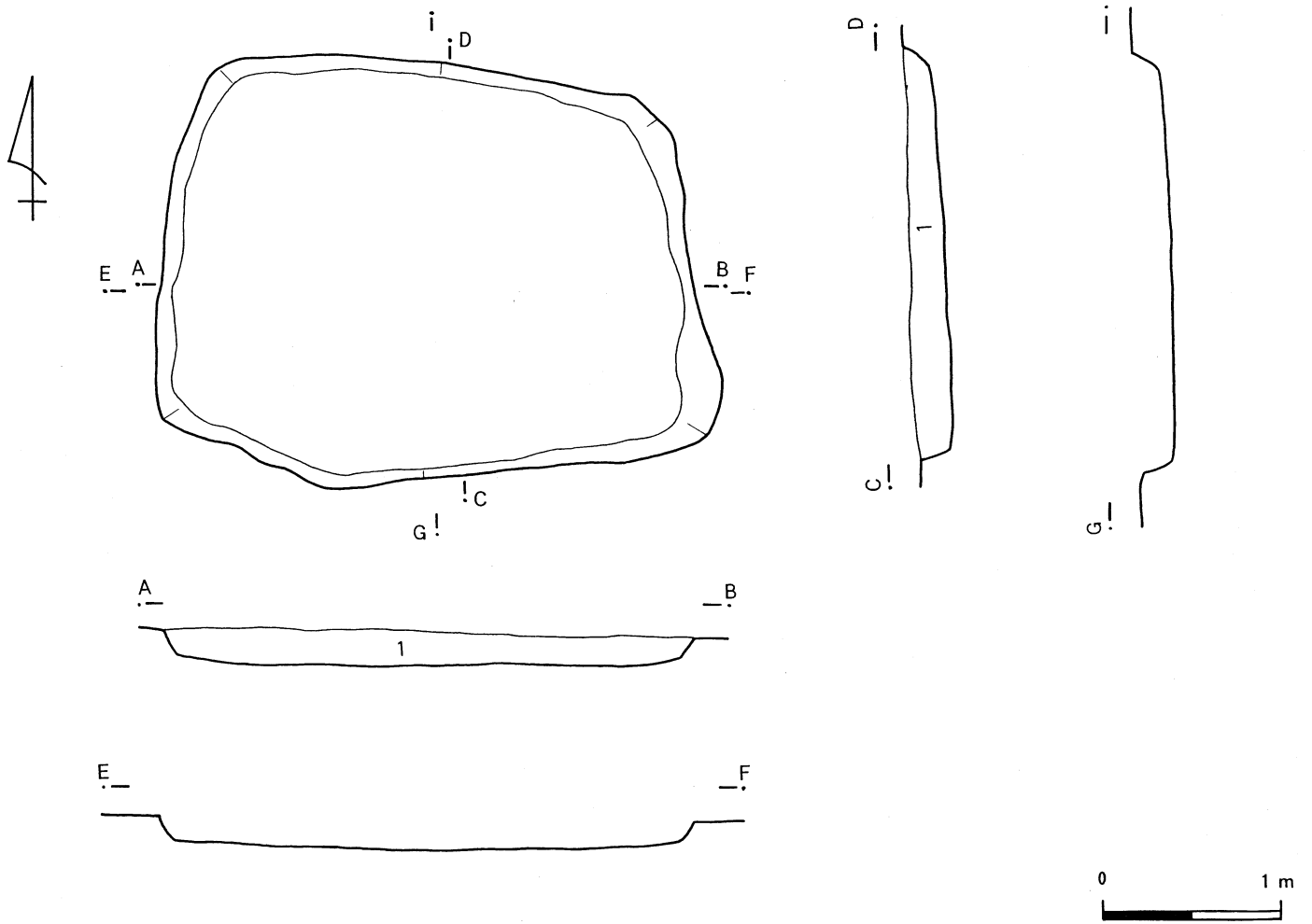


图 24 土坑第 0 1 号实测图

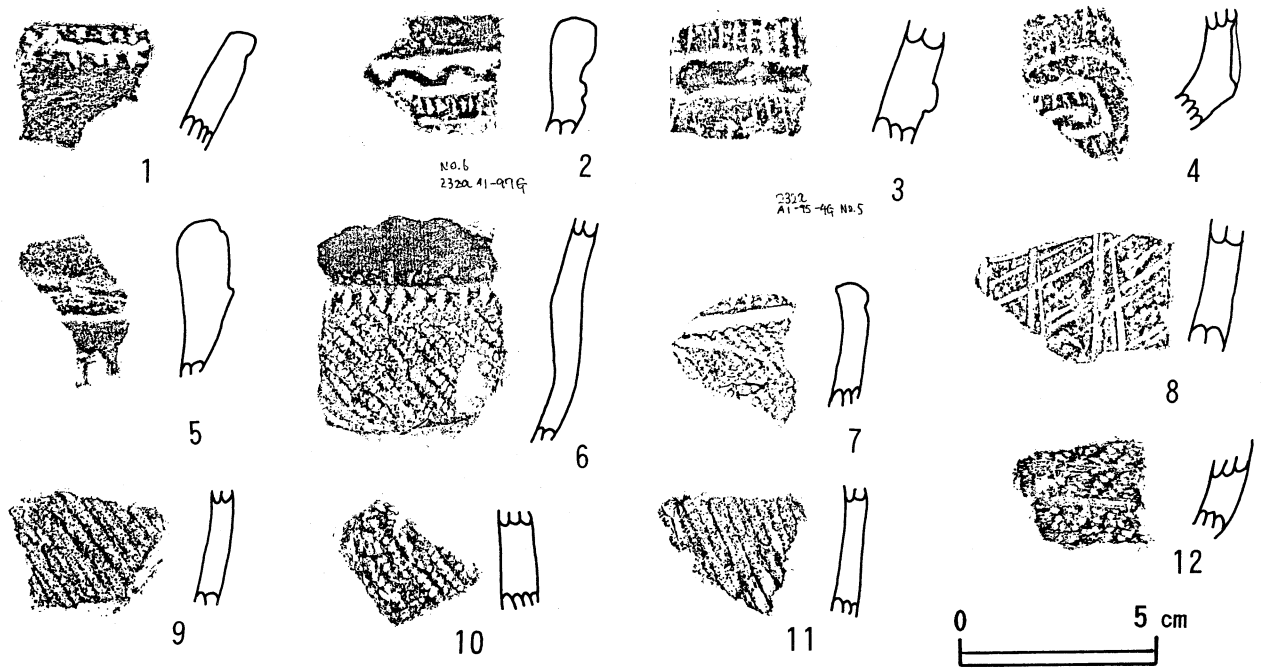


图 25 稻荷前野遺物

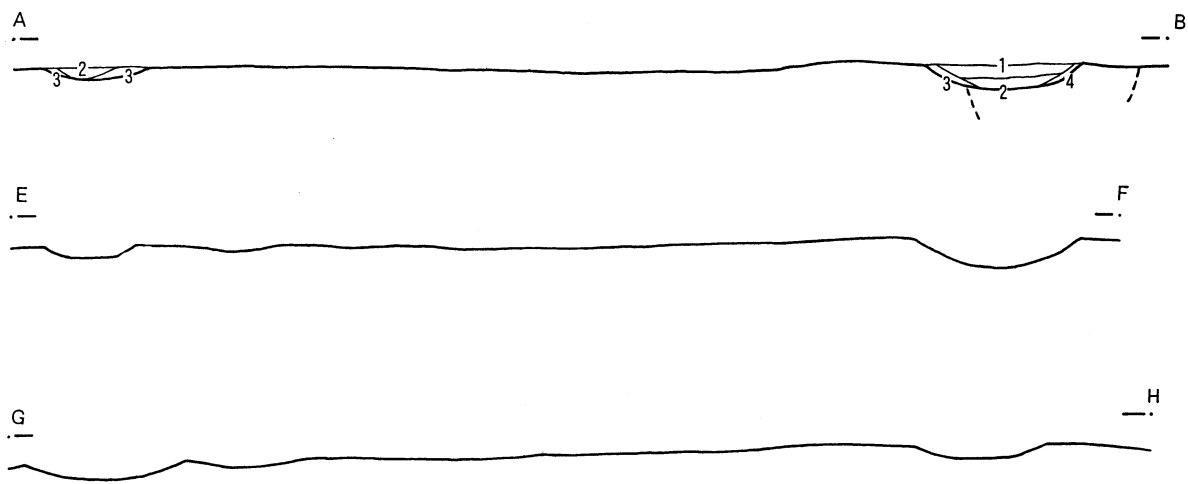
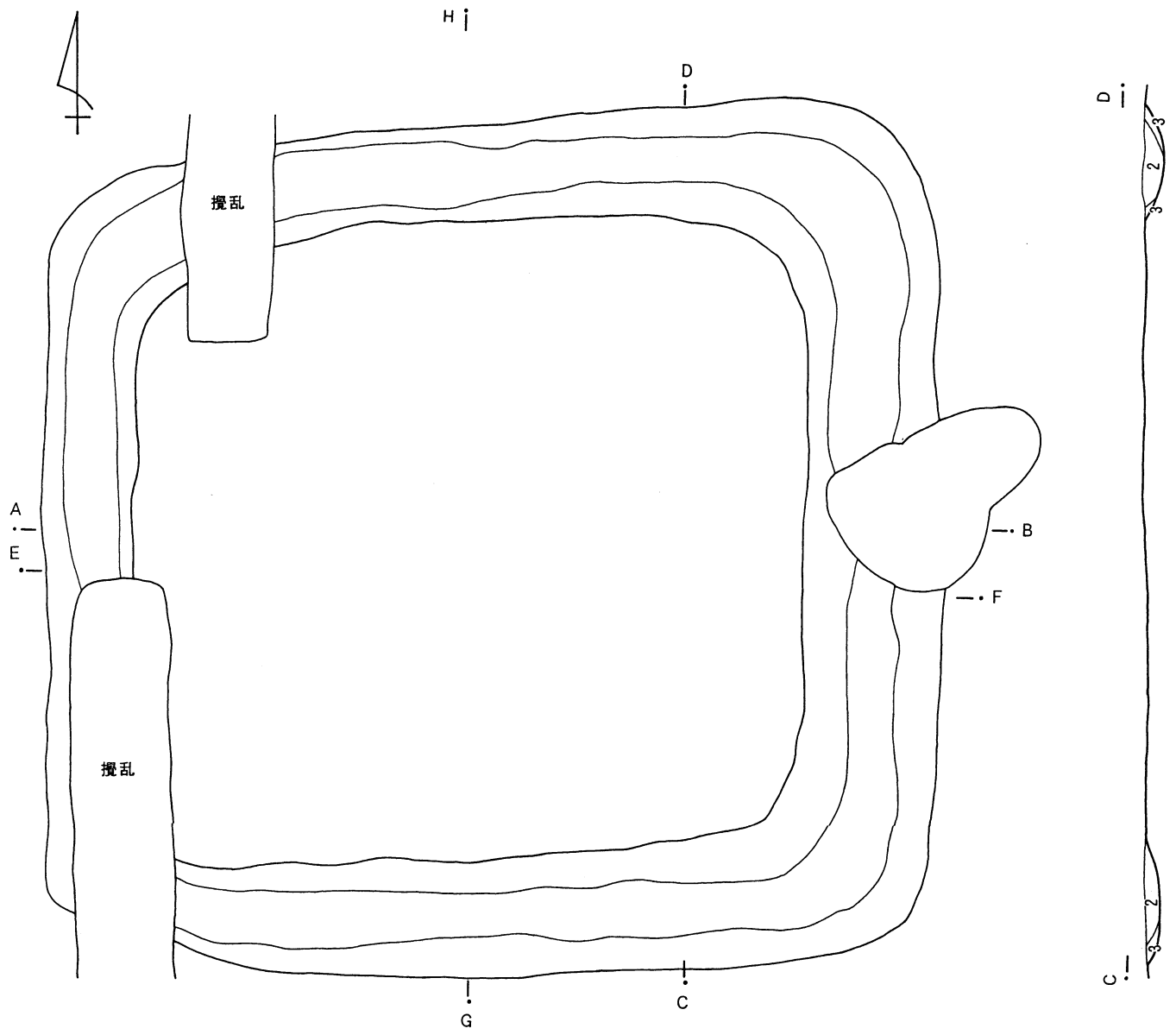
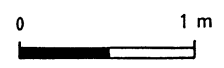


图26 方形周沟状遗构第01号



第01号方形周溝状遺構

調査区東側のほぼ中央に位置する。Ⅱ層ソフトローム層上面で溝を検出し、トレンチを拡張していったところ、方形に巡ることが確認された。1基単独での検出で、群を構成する様相は無かった。前述した01号炉穴と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。

平面形態はほぼ方形で、周溝は全周するものである。規模は約5.86m×約5.61mであり、周溝の主軸方向はほぼ東西南北に一致する。周溝の内側の台状部の形態もほぼ方形で、主軸方向もほぼ東西南北に一致する。台状部の規模は約4.43m×約4.21mである。

周溝の幅は約60cmで、確認面からの深さは約15cmを測り、比較的浅い溝である。周溝の断面形はほぼU字形を呈し、周溝全体をとおしてほぼ一様であった。

周溝の壁はソフトロームの壁であるが、しっかりとした立ち上がりをもち、溝底もソフトロームの底面であった。壁と溝底は明瞭な区分を示さず、溝底からなだらかに立ち上がってゆくものである。そして溝底には、小ピット等の付属施設は検出できなかった。

周溝内の覆土は、黒褐色土系の土を中心に最大4層に分層することができた。堆積状況は、自然堆積によるものと考えられる。

主体部については、台状部及び周溝内いずれからも検出することができず、また、遺物も周溝内からも出土しなかった。

遺物が出土しないことから時期・用途を特定していくのに決定打を欠く感が否めないが、1基単独という検出状況、形態、規模、周辺トレンチからの出土遺物や周辺での表面採集遺物の観察から、奈良・平安時代の方形周溝状遺構と考えられる。

第4節 稲荷前遺跡の調査のまとめ

今回、稲荷前遺跡の調査が初めて行われた。周辺の遺跡を含め、縄文時代早期の遺構として検出されるのは陥穴が主体であったのに対し、上高野原地区で初の炉穴を調査することができた。縄文時代において陥穴が主体として検出され狩猟の場として捉えられる本地区で、それに対する生活域は何処かが、常に問題として提起されるのだが、そのこと考える上で示唆に富む調査例となり、本地区での縄文時代の土地利用や生活環境を考える上での資料を加えることができた。

また、本地区で初めての奈良・平安時代の遺構として、方形周溝状遺構を調査できたことも今回の成果の一つである。方形周溝状遺構の用途は墓と考えるのか一般的であるが、ここで想起されることは、縄文時代と同じになるが、その墓に対する生活域（集落）はどこに存在したのだろうかということである。この問題については、今後の資料の増加を待ちながら、分析を加えてゆきたい。

いずれにしても、縄文土器、奈良・平安時代の土師器等が比較的散布しているにもかかわらず、検出される遺構は意外に少ないという、上高野原地区の遺跡展開の一般的傾向は今回の調査においても看取された。この傾向の意味するところは何か、土地利用形態等については、花粉分析などからのアプローチも必要であると思われる。今後も調査例を増加させながら考察してゆきたいと考えている。

第8章 不特定遺跡の調査と整理のまとめ

かつて八千代市では、京成電鉄成田本線が市域の南側をかすめるようにとおるだけの交通網の状況から、市の北部地区や東部地区は市街化調整地域として開発が抑えられてきた地区であった。一方、市の南部域である京成線沿線を中心とした地区では、東京等への通勤を中心とした住宅地として開発が進められてきた。しかし、東葉高速鉄道の開業が具体化するに従い、その周辺域での土木工事を伴う様々な土地利用が行われるようになった。そして開業後の落ち着きがでるに従い、宅地造成等の大・中規模の開発の一方で、個人等の土木工事を伴う様々な土地利用が行われるようになってきている。このような状況のなかで、八千代市教育委員会でも遺跡包蔵地に対する工事に対して、埋蔵文化財保護の対策をとってきた。

ここに報告した高津新田野馬堀遺跡を含めて6か所の遺跡の調査は、遺跡包蔵地に対して主として個人による土木工事を伴う土地利用に対して、不特定遺跡調査事業として八千代市教育委員会が行ったものである。このうち金塚所在塚や高津新田野馬堀遺跡、神久保寺台遺跡、稲荷前遺跡は千葉県文化財保存事業の県費補助金を得て実施したものであり、萱田町川崎山遺跡、尾崎群集塚の発掘調査は八千代市単独事業として行ったものである。いずれも発掘調査から大分時間を経ているが、今回、整理及び報告を千葉県文化財保存事業補助金を得て実施することとなり、前章までに各遺跡の調査概要を報告してきたところである。

以下、不特定遺跡調査事業として調査した遺跡の成果の概要を、以下にまとめておくこととする。

金塚所在塚

本遺跡の報告した調査においては、金塚所在塚の規模を測量によって知ることができた。八千代市内の塚の規模を比較する資料として、今後意味をもつものとなってくるだろう。測量によって、塚の規模は一辺約10.8m前後で、高さ1mの円形塚であることが判明したが、一辺の長さに対して高さが低いという結果であった。一辺の長さの約1/11という塚の高さが、八千代市内の他の塚に比して、塚としての高さに概括的にみて低すぎないかという感じがしている。そしてこの高さの無さが、この塚を確認しづらいものとしていたのであろう。

一方、封土を全掘したが主体部となるものは検出できなかった。また、塚からは絹雲母片岩の小破片や用途不明の金属片がわずかながら出土しているものの、直接的に塚に伴う遺物なのかは判断できず、築造時代・時期の決定はできなかった。しかし金塚所在塚は、八千代市内の他の塚の築造年代等から判断して、江戸時代に築造されていたのではないかと想定されるものである。

萱田町川崎山遺跡

本遺跡b地点での調査対象遺構は縄文時代の陥穴が1基のみであり、15㎡と小規模な調査面積であったが、萱田町川崎山遺跡を捉えることにおいて大きな成果を得たと考えている。確かに、今回の陥穴の覆土からは遺物が出土せず、しかも、他の調査地点の土器の出土状況を勘案すると陥穴の時期の推定は難しくなってくるが、台地の縁辺においては狩り場として意味をもつことが、この陥穴の存在からみてとれよう。

しかも本遺跡b地点の確認調査及び今回の本調査において得られた成果は、萱田町川崎山遺跡が表面観察のとおり広い範囲にわたっていることが再確認できたことである。しかし、このb地点での調査に

よっても、萱田町川崎山遺跡として広く捉えられる遺跡範囲のなかで、他の調査例等も参考とするならば、形成された時代・時期よっての占地形態が示されていると言えまいか。

今後も萱田町川崎山遺跡の発掘調査が計画されており、遺跡全体としての時代・時期よる占地形態がより明らかになってくるものと考えている。また、そのことを考慮にいたした調査が必要となつてこよう。

高津新田野馬堀遺跡

高津新田野馬堀遺跡はちょうど千葉市との市境にあり、この野馬除土手と野馬堀が近世村落の境となり、近代以降においても境となつてきた分であるが、この野馬堀遺跡の報告した調査によつて、近世の小金牧の野馬堀の構造の一端が明らかになつたと言えよう。野馬除土手は現在、見る影もなく削平されておりその構造を捉えきれていないが、野馬除土手と野馬堀が小金牧の野馬に逃げ出すことを防ぐ対策として、また、野馬の畑への被害をくい止めるための防御機能を考えるためにも、本調査は重要な資料となつてきている。

今回の調査において言えることは、高津新田野馬堀は2度にわたつて掘られていたことが捉えられたことである。第1期においてはやや浅く掘られていたものが、2期目にはより深く掘られていたことが捉えられた。このことが小金牧の野馬堀全体に等しいものであるかは資料の増加を待ちたいが、小金牧南西端の野馬除土手、野馬堀を考える上で新たな手掛かりを与えてくれたと考えている。

また、高津新田におけるこの野馬除土手と野馬堀がいつ造られたかであるが、八千代市内に残る近世文書においては堀浚や補修の願書等が残されているが、造られた時期の手掛かりとなる史料は今のところ発見されておらず、発掘調査でも判明しなかつた。野馬除土手は迅速測図には記載されているが、昭和40年代頃より次第に削平されていき、昭和50年代の開発等により現在は高津新田野馬除土手は姿を消していった。

尾崎群集塚第1号塚

本塚の今回の調査において測量によつて塚の規模が捉えられたことは、八千代市内の塚の性格を知る上で、初歩的であるが、比較資料の増加という観点から大きな意味をもつものと考えている。測量によれば、一辺約14m、高さ2.9mを測る方形塚であることが判明した。また、調査によつて塚の基底部から焼土層が出る等、八千代市域の塚の新しい知見が加わつた。

調査の報告にも記したが、調査範囲は極めて限定的であり主体部を検出できなかつた。しかし塚の基底部からの焼土の確認は、塚を構築することに伴う何らかの行事(祭祀?)が行われたことを十分にうかがわせるものである。その行事がどんなものであつたか、今後、様々な資料を基に復元していくべきであろう。

神久保寺台遺跡 a 地点

本調査遺跡が所在する神久保地区は市街化調整区域に属し、比較的開発の少ない地域である。このため、遺跡の性格等を知るためには表面採集資料等に頼っているのが実情である。そして、今回の確認調査によつて神久保地区の遺跡のあり方等を知る資料となつた。確認調査による本遺跡の弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代の竪穴住居跡の検出は、この台地上に複数の時代にわたつて集落が営まれたことを意味している。また、中世の堀跡の検出はこの地区の当該時期の新たな知見が加わることとなつたといえよう。

確認調査という限定性がある調査であったため、竪穴住居の詳しい内容等は判明しなかった。しかし調査地の北側から弥生・古墳・平安の各時代の竪穴住居跡が検出されたことは、調査区域外の北への集落展開が十分想定できることとして今後の調査の重要な資料となろう。

中世の堀跡はトレンチ部のみの検出であり堀の一部しか調査はできなかつたため、詳細な内容把握までは行なえなかつた。そのため、堀の広がりや目的、土地所有に係わる境界としての役割を持つものなのかも明らかにできなかつたが、この堀の覆土は近世の堀の覆土とやや異なり、全体的に層のしまりをもつものであった。城館跡に係わる堀として仮定しても、地元には城館に関する伝承等は伝わっておらず、城館に付随するものであるのかは即断できない。

近年、九州千葉氏の系図の調査が千葉市立郷土博物館長の丸井氏によって進められているが、それによると八千代市域に係わると思われる武士もおり、その調査と併せて考えて行くべきかもしれない。しかしその一画を調査したのみであり、資料の増加をまって再検討したい。

稲荷前遺跡

今回の稲荷前遺跡 a 地点では、縄文時代早期末の炉穴 1 基と平安時代の方形周溝状遺構 1 基、時代不明の土坑 1 基が検出され、上高野地区の遺跡を考える上で、新たな資料が得られたと言えよう。しかし炉穴に伴う土器片が小さすぎ、時期決定が行なえなかつたことは残念であった。だが、本遺構のような炉穴が単独で存在したとは考えにくく、調査区域外への遺構展開が想定されるものである。また、平安時代の方形周溝状遺構の検出も、本調査地点の占地形態を考える資料になってくるとと思われる。周辺においては平安時代の集落跡の調査が行なわれていないため、即断はできないが、該期の集落の存在が十分に想定できる資料となったと言えよう。

一方、本調査遺跡が所在する上高野地区のうち上高野原地区は、京成勝田台駅に近いこともあり、宅地造成等による開発が多い地区である。しかも平成 4 年度あたりから中層の集合住宅、いわゆるマンション建設に係わる遺跡の調査などが増加している地区でもある。その様な状況のなかで、縄文時代早期から前期にかけての遺跡が、二重堀遺跡や新林遺跡、黒沢池上遺跡等において次々と発掘調査が行なわれてきた。特に、新林遺跡、黒沢池上遺跡等では黒浜期の集落跡が調査され、諸磯、黒浜、浮島期の土坑が検出している。新林遺跡では陥穴が検出され、また、近世のシシオトシも検出されている。新林遺跡や稲荷前遺跡が所在する地区は佐倉市との市境に位置し、近世の集落の外縁に所在しており、近世遺構の存在は、文書史料と併せて考えていくことが今後は必要となつてこよう。

以上、不特定遺跡調査事業等によって発掘調査を実施した 6 遺跡の調査の成果について若干のまとめを行なった。平成 13 年度は千葉県文化財保存事業の補助事業として整理を行い、調査の概要について報告できた訳であるが、いずれも小規模な発掘調査であり遺跡全体の把握には至っていない。それ故に、遺跡の概要報告となつてしまつたが、八千代市域に住んだ先人たちの営みの一端が明らかになつたのではないかと考えている。

尾崎群集塚以外の金塚所在塚や高津新田野馬堀遺跡、萱田町川崎山遺跡、神久保寺台遺跡、稲荷前遺跡の 5 遺跡は既に住宅や倉庫等が建てられ、かつて遺跡が所在したことを想像するに困難な状況となつている。調査実施時期が既に 10 年余を経過したものもあり、この報告をもってその責の一部が果たせたと思つている。今後も、千葉県文化財保存事業の補助事業や八千代市単独事業としての不特定遺跡調査や整理が予定されるが、次第に速やかな報告を行なつていきたいと考えている。

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよしふとくていいせきちょうさほうこくしょいち							
書名	千葉県八千代市不特定遺跡調査報告書Ⅰ							
副書名	一 金塚所在塚・萱田町川崎山遺跡・高津新田野馬堀遺跡・ 尾崎群集塚・神久保寺台遺跡・稲荷前遺跡 一							
巻次								
シリーズ名	千葉県八千代市不特定遺跡調査報告書							
シリーズ番号	Ⅰ							
編著者名	朝比奈竹男							
編集機関	八千代市教育委員会 (生涯学習部 生涯学習課 文化財保護班)							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 Tel.047-483-1151							
発行年月	西暦2002 (平成14) 年 3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かつかいびつか 金塚所在塚	やちよしむぎまる 八千代市麦丸 1130-1	12221	289	35° 44' 18"	140° 6' 2"	19891129) 19891208	225	倉庫建設
かさきまいせき 川崎山遺跡	やちよし かやたまち 八千代市萱田町 730-1	12221	241	35° 43' 15"	140° 6' 40"	19920402) 19920408	15	店舗建設
たかつしんでのまほりいせき 高津新田野馬堀	やちよし やちよだいみなみ 八千代市八千代台南 3丁目59-1	12221	250	35° 41' 29"	140° 5' 19"	19980128) 19980212	500	共同住宅建設
おさきんじゅうか 尾崎群集塚	やちよし おおわだしんぜん 八千代市大和田新田 855-4	12221	143	35° 44' 7"	140° 5' 22"	19980210) 19980223	38	地区ゴミ置場
いものくぼらだいせき 神久保寺台遺跡	やちよし いものくぼ 八千代市神久保 73-2	12221	7	35° 46' 9"	140° 5' 45"	19980302) 19980313	451 (下層4)	資材置場
いなりまいせき 稲荷前遺跡	やちよし かみこうや 八千代市上高野 1130-1	12221	232	35° 43' 5"	140° 8' 20"	19980318) 19980331	120	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
金塚所在塚	塚	近世	方形塚 溝条遺構		1基 1条		遺物検出されず	
萱田町川崎山遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代	土坑 (陥穴)		1基		縄文時代中期土器片	
高津新田野馬堀	包蔵地 野馬堀	近世	野馬堀 用途不明土坑		1条 1基		近世, 近代陶磁器片 千葉市と接する地区 小金牧の牧内は千葉市側	
尾崎群集塚	塚	近世	方形塚		1基		縄文時代中期土器片	
神久保寺台遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居跡 弥生時代後期 古墳時代前期 平安時代 中世堀跡 時期不明土坑		1軒 1軒 1軒 1条 1基		縄文土器片 古墳時代土師器 平安時代土師器 中世陶磁器片	
稲荷前遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 平安時代	炉穴 方形溝状遺構 時期不明土坑		1基 1基 1基		縄文時代早期土器片 平安時代土師器片	



－ 1 金塚所在塚近景



－ 2 金塚所在塚の調査風景



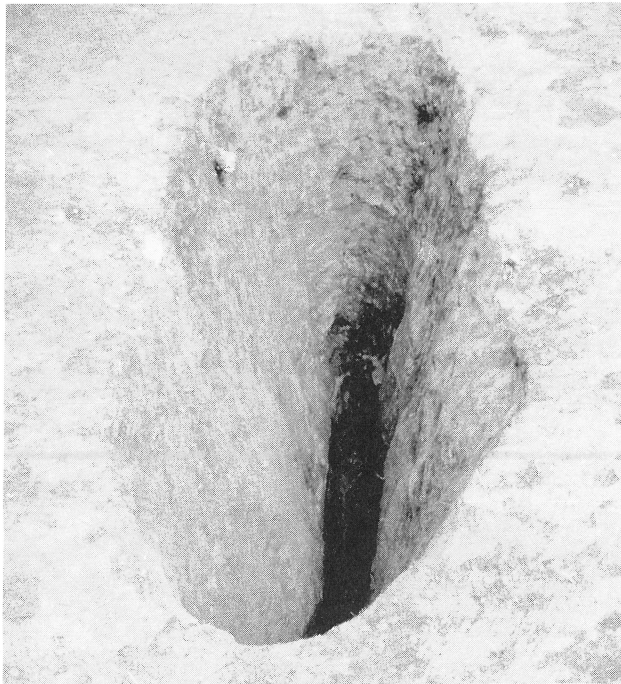
－ 3 金塚所在塚の封土堆積状況



－ 4 塚下の溝 完掘状況



－ 1 萱田町川崎山遺跡調査区近景



－ 2 土坑第 0 1 号完掘状況



－ 3 土坑第 0 1 号の土層堆積状態



－ 1 高津新田野馬堀遺跡調査区近景



－ 2 野馬堀の確認状況



－ 3 野馬堀の土層堆積（中央トレンチ）



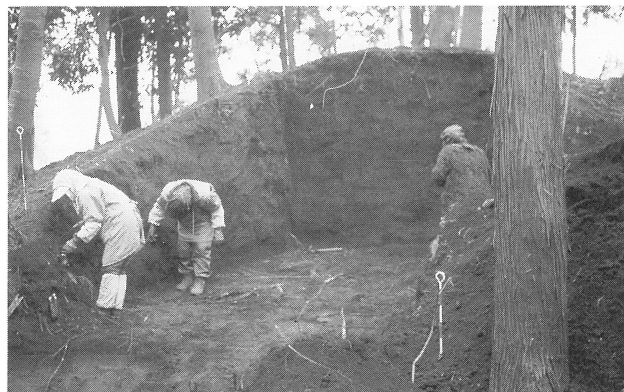
－ 4 土坑第01号



- 1 尾崎群集塚第01塚近景



- 2 尾崎群集塚第01塚調査部近景



- 3 調査風景



- 4 封土堆積状況



- 5 焼土分布状況



- 1 神久保寺台遺跡調査区近景



- 2 第03号竖穴住居跡確認状況



- 3 土坑第01号確認状況



- 4 堀01の確認状況



- 5 堀01の土層堆積



－ 1 稲荷前遺跡調査区近景



－ 2 稲荷前遺跡調査風景



－ 3 炉穴第 01 号完掘状態



－ 4 方形周溝状遺構第 01 号完掘状態



－ 5 土坑第 01 号完掘状態

千葉県八千代市不特定遺跡調査報告書Ⅰ

一金塚所在塚・萱田町川崎山遺跡・高津新田野馬堀遺跡
尾崎群集塚・神久保寺台遺跡・稲荷前遺跡一

印刷 平成14(2002)年3月25日

発行 平成14(2002)年3月29日

編集 八千代市教育委員会

(生涯学習部生涯学習課文化財保護班)

発行者 八千代市教育委員会

〒276-0045 八千代市大和田138-2

印刷 亀井印刷所
